

浅野誠沖縄論シリーズ

2003-2010

1. 沖縄

はじめに

2003年からホームページで、2007年からはブログで、沖縄をめぐっているいろいろと書き綴ってきた。2004年から沖縄生活を再スタートしたが、前年の2003年からその準備を始めたから、この期間はその前の1972年～1990年の第一次生活で体験し書き綴ってきたものを、改めて捉えなおすという性格をもっていた。沖縄について書いたわけだが、それはひるがえって、私自身を書いたことにもなる。

それらを整理編集して、4分冊にした。各記事冒頭に示した年月日は、ホームページ・ブログへの掲載日だ。誤字脱字の補正などはしたが、ほぼ原文のまま掲載した。

4分冊の構成は、

1. 沖縄
2. 沖縄の暮らし
3. 沖縄の歴史
4. 沖縄の教育

である。引き続き作業をすすめ、2013年中に公開する予定である。

目次

1 1. 沖縄とは？

沖縄印象	5
沖縄にいることは引込むことだという感覚	5
沖縄についてのステロタイプの認識	6
ステロタイプ思考「沖縄は遅れている」が見落としていること	6
琉球大学編『やわらかい南の学と思想』（沖縄タイムス社2008年）	7
「うちなーぐち」は沖縄語——宮良信詳説 琉球大学本2	7
国連人権委員会『沖縄先住民の権利保護を』という新聞記事	8
国連人権委員会『沖縄先住民』問題勧告の英文見つける	9
『沖縄先住民』問題、続論 この勧告の重大性	10
そっけない政府答弁書 沖縄/琉球先住民（族）問題	11
薩摩の琉球入り400年の2009年の企画	12
多田治『沖縄イメージを旅する』（中公新書2008年）を読む1	13
多田本2 本土からのツーリストのまなざしとナショナリズム	13
多田本3 貧困イメージと「古きよき琉球へのロマン主義」	14
多田本4 「愛郷心を通して愛国心を示す」	15
多田本5 「蔓延する沖縄病」と「癒し」	16
多田本6 イメージ消費 脱線話—観光でないツーリストたち	18
多田本7 沖縄の「内と外」 「沖縄ブームから沖縄スタイルへ」	18
多田本8 沖縄イメージ ちゅらさん モンパチ 琉球	21
多田本9 観光はいったん否定されることを通して受け入れられる	21
どんな沖縄イメージを発信するのか	23
「沖縄の出生率はなぜ高いのか？」	24
魚 昆布 鰹節 じゃこ	25
大国と沖縄	25
民族自決と精神 沖縄	26
自ら全国に「同化」していこうとする発想	26
外来物をチャンプルー化し、沖縄独自のものを作り出していくこと	27
自然・神・心・戦 千葉大学学生の礼状に見る沖縄印象	28
Momotoモモト・・・新刊雑誌	30

12. 移民移住・多文化・バイリンガル

移住・交流の視点から沖縄をとらえると	31
多文化のなかで生きる 安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人 ・アメラジアン』（クバプロ2007年）を読む	32
英日西仏語雑誌OKINAWA 小川京子さんのクバ物語掲載	37
沖縄と移民	37
村上呂里さんの沖縄の言語教育にかかわる鋭く示唆的な論文を読む	38
沖縄とバイリンガル 村上さんの本から学ぶ	42
この本の私にとっての主ポイント 村上さんの本から学ぶ2	43
日本語創造とウチナーグチ 個人体験 村上さんの本から学ぶ3	43
「沖縄的なもの」への肯定と否定 村上さんの本から学ぶ4	44
言語観 生活・文化と道具・科学 村上さんの本から学ぶ5	45
沖縄的なものを教える 文化と生活現実 村上さんの本から学ぶ6	46
バイリンガル再論 村上さんの本から学ぶ7	47
地域・国・グローバルという視野で 村上さんの本から学ぶ8	48
実践をどう展開していくか 村上さんの本から学ぶ9	48

13. 政治

沖縄国際大学米軍ヘリ墜落	50
ステルス戦闘機F22Aが上空を轟音で飛ぶ	50
飛行機事故	50
『教科書検定』県民集会	51
県民集会に参加した人々と交通手段	52
県の旅券センター 久しぶりの国際通	52
会場外会場？も人がいっぱい 基地撤去集会 会場溢れる	53
沖縄自治の創造へ 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む1	53
基地認識をリアルに 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む3	54

14. 沖縄の産業・沖縄おこし

子ども未来ゾーンのすごい構想	56
沖縄道路事情と沖縄経済	56
出稼ぎ	56
沖縄の開業率・廃業率日本一は喜ぶべきか悲しむべきか	57

サステイナブル・ツーリズムとニューツーリズム 琉球大学本4	57
新城明久『沖縄の自立に向けて 農業・産業活性化へのヒント』	59
新城『ヒント本』「沖縄の農業の可能性」壮大で確実な提案	60
新城『ヒント本』3 教育・平和と結びつけて	61
新城『ヒント本』4 農林業と観光とを結びつける	62
私達もお世話になった医介輔 歴史の幕を閉じる	62
照屋善義『沖縄の陶器 技術と科学』	63
吉本哲郎『地元学をはじめよう』 ワークショップ型地域づくり	63
吉本『地元学』本2 発見創造型ワークショップそのもの	64
吉本『地元学』本3 若者・子どもを「地元」で育てる	65
「地域に開かれた大学」を越えて、「地域からつくる大学」へ	66
「南城物語」「南城学」という科目の授業があったらどうでしょう	67
大江正章「地域の力—食・農・まちづくり」(岩波新書)を読む	68
「地域の力」本2 I・Uターン 商店街 販売に主導権をもつ農	69
地域おこしの担い手 字・自治会 自治体職員 議員 フリー	70
「観光と有機農業の里・阿智」の村づくりの本を読む	70
阿智本 地域づくり主体 地域自治組織=自治会	71
阿智本3 村づくり委員会	72
阿智本4 議員・職員	73
阿智本5 一人ひとりの人生の質を高められる 全村博物館構想	74
井口貢編著『入門文化政策 地域の文化を作るという事』	74
築山崇、桂明宏編著「ふつうの村が動く時」を読む	75
自立経済の創造へ 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む2	76

1 1. 沖縄とは？

沖縄印象 (2003年12月28日)

このところ、一カ月に一回ぐらいの間隔で沖縄に滞在している。私が住んでいた14年前と比べるといろいろなことが変わった。道路がえらくよくなった。だが、沖縄の新聞のなかで、金子勝さんが沖縄の何かの会で「公共投資」に依存する時代が過ぎようとしているなかで、どうしていくのか、という問題提起をおこなっていた。まさに重要な問題だ。

かつては基地中心であったが、「復帰」後はそれだけでなく公共投資・観光などを軸にしてきた沖縄経済は、復帰前と比べて外見上の「豊かさ」をえてきた。クリスマス・イルミネーションが家々を飾り、そのコンクールが開かれているのもその一つの象徴だろう。オシャレな店もすごく増えた。それらのなかには、たんに派手とか、流行を追うというのではなく、手作りの工夫のある店もある。アジア物産を扱う店、「癒し」系の店も増えてきた。こうした変化が何をつくりだしつつあるのか、そして今後どんな方向に進んでいくのか。ゆっくりと観察し、参加していこうと思う。沖縄の仮住まいから摩文仁の丘の夕陽がすごく美しくみえる。道東の霧多布で見た夕陽ととても似通っている。そんな風景をみながら、いろいろな思いが浮かんでくる。

沖縄にいることは引っ込むことだという感覚 (2004年月28日)

先日、ある会で、「沖縄に行くということは、全生研をやめるということですか」と尋ねられた。そのとき、その質問自体にキレてしまった。いろいろなところにてかけてかなり積極的に活動している人なので、よけいキレてしまった。

「日本の中央から遠く離れた沖縄にいるということは、全生研のような全国規模の仕事から離れることに違いない」という感覚がかなり広く存在しているようだ。そこには、無意識な形にせよ、中央集権的な発想が忍び込んでいる。東京、ないしは東京・愛知・大阪というところが、日本の中心で、全国規模の仕事をするなら、その中心地域にいないてはならない、という発想である。

現実的に言おう。これまで私が住んでいた愛知と東京、沖縄と東京との距離は、地理的には大きな違いがあるもの、時間でいえば、移動所要時間は、愛知と東京では自宅から会議場まで3～4時間であり、沖縄と東京では、4～5時間、交通経費でいうと、一泊代金を含めれば、3万円と4万円の違いなのである。愛知と他の地域、沖縄と他の地域ということであっても、それぞれの近隣地域をのぞけば、大差ない。実際、このところ、私は愛知や東京と沖縄とは月一回の頻度で往復している。

これは現実的なことであるが、考え方の問題は決定的に重要である。この列島の文化・政治・経済は、多様な地域が響きあいながら、豊かなものを協同的に築きだしているという発想があるかないかである。沖縄に対して、遠くて列島のはずれであるという感覚を、たんに地理的だけでなく、政治的文化的にもち、それが結果的に差別

感覚を生んでいる。だから、沖縄は異国情緒あふれる観光地であり、かつ戦場経験があり、米軍がいて「かわいそうな」地域という感覚になるのである。

一極集中をおしすすめる政治経済関係者だけでなく、それを批判する人々までそういう感覚に陥っている。この感覚でいくと、イラクも遠い話になってしまう。

沖縄についてのステロタイプの認識 (2004年10月13日)

もう古い話だが、1972年春、私が沖縄に移住する際に、それまで家庭教師をしていた中学生から、「英語で話すんですね」といわれたが、そのような沖縄認識は意外と根強い。

今でも、夏の沖縄は日本で一番暑いという認識はかなり広汎なものだ。少々脱線するが、私にしても、沖縄の日照時間はトップクラスだと思っていたが、沖縄の日照時間は、日本では最下位クラスなのである。太陽光発電を考えていた私に、建築家が指摘してくれたことだ。そんなことで、風力発電を我が家に設置することを考えているのだが、まだ現実に設置できるレベルにまで達していない。

こうしたステロタイプの発想の基盤には、本土、とくに東京を標準にして考える根強い「クセ」が存在し、多文化日本としてとらえる発想は底が浅い。こうした考え方は、中央集権的な考え方と結びついているが、さらにそれは大国主義的な考え方と結びついている。沖縄に対するオリエンタリズム的なまなざしもそのうちである。

しかし、それらは、歴史的にみれば、まだ100年ぐらいの「蓄積」しかないし、「上」からつくられ、下ろされてきたものだ。それを下からの多文化的なものへといかに転換させていくのか、それは大きな課題である。

ステロタイプ思考「沖縄は遅れている」が見落としていること (2007年5月9日)

私は『沖縄教育の反省と提案』(1983年明治図書)で、本土と沖縄とを比較して「沖縄は遅れている」と把握し、「本土に追いつく」ように主張する発想を詳しく検討し批判した。

その発想は、以前ほどでないとしても、いまだに根強く存在している。ついさきほども、沖縄のために熱心に働いていると思われる方からも聞いた。とくに教育界では強い。「学力低下」論などが典型的である。その意味では、ステロタイプ化した発想である。その歴史は17世紀までさかのぼることができるが、明治期以降とくに強化された。

その発想には、「本土は、優れているもので、モデル・標準とすべきもの」という把握が前提にある。そのモデル・標準に比べて、ということで、予め追求すべき価値が定まっており、沖縄の独自の価値、および本土以外の価値との関係は排除される。その際の本土は、日本の中心であり、近年の象徴的イメージとしては東京など大都市である。あるいは日本の全国平均値である。

そうした発想をとると、沖縄の独自性を低くみることにつながる。それはさらに、沖縄内では那覇などの都市地域を高くみて、個々の地域を低くみることに通じる。また、全国各地の地域との具体的なつながりを見落とし

ていく。そうしたなかで、「日本の中心への依存」体質を育むことにつながる。そして、「日本の中心のありよう」への疑問批判という姿勢が閉じられる。沖縄を含めて全国各地の地域が協同して、日本をつくっていくという発想が閉じられる。

さらにいうと、日本国内だけに視野を限定する。地球上の各地とつながってきた、つながっている沖縄の歴史を見落とすことになる（たとえば世界のウチナーンチュ）。日本という枠組みにとらわれなくて、沖縄と地球とのつながりをみないことになる。学力問題でいうと、世界的に関心と呼んでいる「学力」に関心をもたないで、日本の文教施策が追求している「学力」のみに関心を限定してしまう。

幸いなことに、ここ玉城にいと、地元の人々、移住・訪問してくる那覇などの都市地域の方々、移住・訪問してくる全国各地、世界各地の方々と、多様な方々とのつながりのなかで、多様で具体的な発想が豊かに育まれていく。

琉球大学編『やわらかい南の学と思想』（沖縄タイムス社2008年）

（2008年9月1日）

440ページにも及ぶ分厚い本だが、2500円とえらく安い。おそらくなんらかの補助金があるためだろうか。

35編にわたる多様な分野の論文が並んでいる。私個人としては興味深いものが多いので購入したのだが、個人で購入しようとなるととまどってしまう人が多いだろう。

まだ半分しか読んでいないのだが、大学人でなくても、わかりやくなじみやすい文章と、専門用語続出で難しい文章とが同居している。私には、よく知っている内容であるものと、初対面の内容で刺激的なものが、これまた同居している。

1990年まで琉球大学につとめていた私にとって、執筆者のうち数人は顔なじみである。それにしても、私がいたころと比べると、琉球大学の研究が広がりにおいても深まりにおいても、かなり前進していることがわかる。無論、今日の沖縄の課題に対応する研究水準ができていのかどうかについては、あらためて検討しなくてはならない。そのあたりは、いささか疑問符をつける私だが。

「うちなーぐち」は沖縄語——宮良信詳説 琉球大学本2（2008年9月3日）

ウチナーグチは、日本語のなかで琉球方言、そのなかの沖縄方言を指すものというのが、これまでの常識的な言い方であり、私もそうした表現を使ってきた。

しかし、宮良論文は、タイトルが——「うちなーぐち」とは沖縄語？ 沖縄方言？——となっており、この常識に挑む。

そして、いとも簡単に「社会言語学的な客観的基準を当てはめると、すべて「うちなーぐち」が独立した

一つの言語であることを裏づけているので、「沖縄語」がただしくて、「沖縄方言」ではないことが意外と簡単に決まってしまいました。」(P152)と書かれる。

具体的な裏付け・説明などは専門的説明で、私には難解であった。だが、私の生活実感からいうと、そうだろうと思う。

「大和語と呼ばれる日本語と沖縄語との言語的な距離はさらに広がり、おそらく英語とドイツ語との間にみられるような言語的な関係になっていると思われます。」(P164) そうだろうな、と思う。

日本語と沖縄語との関係、とくに沖縄語が日本語のなかの「一部」をなす、だから「沖縄方言」なのだ、という近代以降展開されてきた主張には、歴史的背景がある。つまり、「沖縄は日本の一部なのだ」と主張することで、「国民国家」、あるいは日本ナショナリズムのなかに「沖縄」をくみこもうとする政策、と同時に、「日本国民」であることの存在証明をしたいという願望である。それをめぐる葛藤が多くのドラマをつくりだしてきたことは、広く知られていることである。

「沖縄」「琉球」を対象とするこの本でも、このことが隠れたモチーフとして存在している。たとえば、林泉忠「沖縄アイデンティティの読み方」、我部政明「なぜアメリカは沖縄統治を行ったのか」、土肥直美「骨に刻まれた沖縄人の歴史」などには、それが出てくる。

島津による近世沖縄支配に問題の淵源をたどることもできるが、明治期以降の日本政府による沖縄統治のなかで、「沖縄アイデンティティ」の問題は、国民国家、ナショナリズムの問題と結びついて語られることが圧倒的であった。アイデンティティにはいろいろなレベルがあるが、それが、このレベルを軸に語られることに、この間の重要な特質がある。アイデンティティ問題を相対化して、新たな光をあて問題提起することが、今日、重要な課題となっていると思う。そうした素材を多く提供しているこの本ではあるが、その先は読みとりにくいレベルといえよう。

国連人権委員会『沖縄先住民の権利保護を』という新聞記事(2008年11月4日)

11月1日の『琉球新報』の記事である。

本ブログのタイトルは、新聞の「見出し」をそのまま使った。

小さな記事なので、見逃した人が多いだろう。

読んだ人のなかには、この記事を読んで、ドキッとする人、「どういうこと？」と考えてしまう人などがいる。それらを含めて、いろいろな反応がでそう。

私は沖縄にとって、重大な意味をもつと考えている。

10月31日に行われたアムネスティ・インターナショナル日本などの人権団体の記者会見にもとづく報道だ。国連B規約(市民的および政治的権利)人権委員会が日本政府に対して行った勧告についてであるが、そのなか

に次のようなものが含まれているという。

「沖縄やアイヌの人々の先住民族としての権利」

「日本は沖縄やアイヌ民族を国内法で先住民と認め、その文化、伝統的生活様式、土地の権利を守る措置を実施しなければならない」

「子どもたちが自らの文化や言語、歴史についての教育を受ける権利を提供すべきだ」

この報道についてのその後の反応をまだ聞いていないが、私は、この勧告に強い関心をもつので、この勧告の詳細を調べることが必要だと思っている。

また、この勧告に対して、日本政府だけでなく、沖縄の行政機関（当然教育機関が含まれる）、沖縄の人々がどう対応するのか。この対応を注視したい。

と同時に、私なりの考え・提案をまとめていきたい。

国連人権委員会『沖縄先住民』問題勧告の英文見つける（2008年11月5日）

国際的な文献をインターネットで探すに慣れていない私だが、ようやく昨日書いた問題についての原文を探し出した。

タイトルは、

Consideration of reports submitted by states parties under article 40 of the covenant
Concluding observations of the Human Rights Committee Japan

この記事の末尾に関連項目を引用する。私もこれからこれについて検討してみようと思う。

この問題については、沖縄のなかで関心をもつ人が限られているようだ。強い関心をもつ人たちがいそうで、その記事を検索してみたが、数年前の記事がほとんどである。

私が見つけた今回の件での記事で詳しいのは、やはり、記者会見をしたアムネスティ・インターナショナル日本と日弁連のサイトだった。しかし、両組織が強い関心を抱く死刑問題などには詳しいコメントがあるが、沖縄問題についてのコメントは見当たらない。

なお、この勧告の途中審議にかかわる英文報告も国連から出されているが、その報告には、沖縄問題は登場してこない。

また、似たものとして、国連の「社会権規約委員会・総括所見・日本（第二回）」（2001年）がある。その際の文面では、indigenous という用語は沖縄に関して使用されていず、minority groups の一つとして Okinawa community という用語が使われている。

the Ryukyu/Okinawa as indigenous peoples entitled to special rights and protection. (art. 27)

The State party should expressly recognize the Ainu and Ryukyu/Okinawa as indigenous peoples in domestic legislation, adopt special measures to protect, preserve and promote their cultural heritage and traditional way of life, and recognize their land rights. It should also provide adequate opportunities for Ainu and Ryukyu/Okinawa children to receive instruction in or of their language and about their culture, and include education on Ainu and Ryukyu/Okinawa culture and history in the regular curriculum.

『沖縄先住民』問題、続論 この勧告の重大性（2008年11月7日）

わざわざ英文まで紹介して、この問題について検討しはじめたのには、いくつかの理由がある。

その一つは、『the Ainu and the Ryukyu/Okinawa as indigenous peoples』（アムネスティが示した和訳によると「アイヌ民族、琉球・沖縄の先住民族性」についての理解をめぐってである。

この民族（性）は、ピープルズであって、ネイションではない。民族というと、日本国家＝日本民族という「単一民族論」に影響を受けたとらえ方に影響されて、ここでいう琉球・沖縄の先住民族（性）を、日本民族と対比的なものとしてとらえる傾向がでてこないか、危惧するからである。

日本は実に多様な民族（この場合、私はネイションという用語よりは、エスニック、ないしはこの勧告で使われているピープルの方が的確だろう）によって構成されており、その多様なものの一つとして沖縄・琉球が存在するという把握が必要である。

その意味では、1～2年前の琉球大学教員による、沖縄住民へのアンケート調査によると、「沖縄人であり日本人である」という多数の人々の自己認識は、当然のものである。沖縄人をとるか、日本人をとるかという問題ではなく、沖縄人であり日本人なのだ、という把握でいい、と私も思う。

あえてこう書くのは、この勧告を、日本と分離した独立国家をつくるべきという主張のように理解する流れ、あるいはそれに類似した流れ、あるいはそれとは対照的な流れなどがありそうだからである。

第二に、この問題について、その後マスメディアに、このことについての県内の反応報道がないことについてである。また、この勧告がでてくるまでに、県内から国連に働きかけた動きは、きわめて限られている。おそらく行政機関からはなにもなされなかったのだろう。

しかし、こうした国連機関からの勧告は、法的には実に重大なものである。日本の行政機関には、こうした勧告を履行する義務が生じるからである。しかし、日本の行政機関は、こうしたことに対して、国内への影響をできるだけ小さくしようとする傾向に満ちてきた。そして、こうした勧告を広報することはほんの小さなものにとどめられてきた。だから、大多数の人は知らなかった。関係する機関の人でさえ知らない人が多かった。

今回の勧告は、たとえば沖縄県教育委員会や各公立学校が、これをどう具体化するかという国際的義務を発生させるものである。なにせこう述べているからだ。（浅野誠訳）

「アイヌおよび琉球・沖縄の子どもたちに対して、かれらの言語を使つての授業を、ないしはかれらの言語の

授業を、そして、かれらの文化についての授業を受ける適切な機会を提供すべきである。そして、アイヌおよび琉球・沖縄の文化と歴史を正規の通常カリキュラムに含むべきである」

だから、たとえば社会科や国語科などは当然のこと、学校カリキュラムのなかに、こうしたものを正規に含ませる必要があるということである。日本全体に通用する学習指導要領だけでなく、沖縄独自の指導要領を作成し実施しなくてはならない。シマクトウバの日を設けて、ウチナーグチに関心をもたせたり、音楽でサンシンや沖縄の歌を導入するといった、これまでの動向を、たんに広げる以上のステップアップが求められるのである。

もし学力テストをすればしたら、全国共通のものだけでなく、沖縄特有のものも必要になることになる。

こうした重大な内容を含むものでありながら、このことについての対応を、私はまだ見つけきれない。

ついでだが、こうした報道をしたタイムスや新報は、当然のことながら、県の教育行政機関がこれにどう対応するか報道するのは当然のことだろうが、そうした取材も見当たらない。アムネスティや日弁連の記者会見を報道しただけにとどまっている。その報道も、実はこの勧告のもつ意味の重大性を認知して行っているのかどうか、いささかこころもとない。

ここまでは、紹介・解説的なものにとどまって、実は私自身の意見をほとんど述べていない。それについては、私自身も今後深めていかなくてはならない、と思っている。

そっけない政府答弁書 沖縄/琉球先住民（族）問題（2008年12月14日）

今朝の朝刊に、国会議員喜納昌吉さんへの政府答弁書の報道があった。

「『琉球民族』の意味するところが必ずしも明らかでない」

「沖縄振興計画に基づき、沖縄で傳承されてきた文化的所産の保存や活用、地域の文化振興に取り組んでいる」といった具合に、これまでやってきたことそのままである。もう少し積極的な姿勢があれば、と願っていたが、まさにそっけない答弁だ。

記事全体もそうだが、「文化遺産の保護」的色彩が強い。私は、かねてから沖縄の文化は、単なる遺産ではなく、これまでの歴史的蓄積をふまえながら、現在もなお創造活動が豊かであり、これからもどんどん創造されていく、ということに特徴があるとくりかえし発言してきた。それは、1070年代末に、当時の東京芸術大学教授で民族音楽専門の小泉さんの講演・著書に触れて触発されたことだ。

だから、「文化遺産」保護の発想で、沖縄文化を「鑑賞」という傾向には手厳しく発言してきた。たとえば首里城復元についても、私はそれほど歓迎したくはない。あれだけの財政支出をするなら、もっとすることがあるだろう、とさえ思ってきた。

また、これらの政府答弁書や記事は、「文化」だけに触れて、「言語」についてまったく触れていないのが、おおいに気になる。

薩摩の琉球入り400年の2009年の企画（2008年11月18日）

日曜日の「日本酒を飲む会」での話。参加者の一人が、何かを企画したいとの発言。

考えてみれば、沖縄の歴史にとって、現代にまでつながる重要な事件である。何かの企画があつていいだろうと思う。どういう角度から企画するのかわ、大きな論議を呼ぶだろう。論議を呼ぶこと自体がいいことだ。

ところで、その場で、奄美はどうかかわるのかわ、一つの話題となった。沖縄側からの発想でいくと、奄美が沖縄から分断され、薩摩の直接支配下に移ったわけだから、そのことを問題にしようとなる。しかし、当の奄美にしてみれば、それ以前の首里王府支配（沖縄統合）をどう評価するのか、という問題もある。薩摩だけでなく、沖縄も支配者であるという考え方もありうるからだ。となると、宮古八重山にも共通する問題がある。

道州制をめぐる、沖縄単独州の方向が盛り上がっているが、その際に、奄美はどうなるのだ、という問題も発生してくる。

それにしても、かつて30万人の人口があつた奄美がいまでは13万人だという。奄美の「衰退」状況にいかに対していくかという問題も並行して存在している。

昨年から、このブログでも書いてきたが、奄美を訪問したいと思っている。できれば、少し長めに。

多田治『沖縄イメージを旅する』（中公新書2008年）を読む1

（2009年1月21日）

序章にこう書かれている。

「東京と沖縄を行き来する移動性に身をゆだねながら、両地点をつなぐ関係性の上にとってみよう。あえてツーリスト的な外からの視線を逆用することで見えてくる『沖縄』も、きっとあるだろう。」P34

「方法としてのツーリスト」というわけだ。

そして、「マッカネルの視点を借りれば、ツーリストは単に、観光という特定の領域に限定された、一個人にとどまらない。ツーリストとは、近代という時代に生み出される、歴史的・社会的存在でもある。ならば、ツーリストを切り口にして、近代社会のひとつの断面にアクセスすることもできるはずだ。」P35～6とも述べられる。

こうした立場から、戦前から今日にいたるまでの「沖縄イメージ」について述べられていく。

このように、ツーリストの立場にたつて、かつまた「観光」ということに焦点を絞って、沖縄イメージを述べるということは、私にははじめての出会いである。無論、ツーリスト的なまなざしでの発言には頻繁に出会う。だが、そこに焦点化して、本格的に論じるものに出会うのははじめてだ。

それだけに、私が気づかなかつた多くのことが、新鮮さをもって、私に入ってくる。私も沖縄史にかかわって仕事をしてきたが、私の視野にはなかつた指摘が多い。その意味では、私の今後の沖縄史作業にも示唆を与えて

いく可能性がある。

もう一つ、私が沖縄に住んでいなかった1990年代から2000年代前半について、そこでどのような「社会的事態」がおこっていたのか、についても知るが多かった。

「方法としてのツーリスト」は、対象物を客観的に把握するうえで、大変有効なものであろう。私にも、そうしたまなざし・方法がまったくないとはいえない。

しかし、私には、「当事者」としてのまなざし、視点が濃厚である。著者の言葉を借りれば、「方法としての当事者」かもしれないが、そんな表現はない。

私の場合は、「沖縄の教育にかかわる当事者」である。本著と、時代的に重なる点が多い1983年刊行『沖縄教育の反省と提案』（明治図書）などには、それが猛烈に出ている。だから、「沖縄教育」に対する強いメッセージ性をもつものとして、意識的に書いたのだ。もう一つの『沖縄県の教育史』（1991年思文閣）、先史時代から明治期までであるが、「当事者性」のまなざしを鋭く投影させて書いている。

そんな私からいうと、著者の指摘に対して、「それではどうするの」「どうしたいの」と、つい問いたくなってしまうことがしばしばであった。

こういう風に思う理由の一つは、沖縄研究・沖縄調査にこられる方のなかに、沖縄の情報を収集して、その人なりの論文などを書くのだが、情報を集められた当事者から見ると、「情報を一方的に収集された」、強くいうと「とられてしまった」という感じが残されてしまう体験が結構多いからだ。

また、当事者性が希薄だと、「足どり軽く」書ける・発言できる、という面がある。当事者だと、なかなかいえない、あるいは婉曲にしかいえない、ということが結構多い。私の「沖縄教育の反省と提案」にもそうした様相が色濃く出てしまっている。

このあたりは、社会学と、教育実践にかかわる教育学の違いからでているのかもしれない。

多田本2 本土からのツーリストのまなざしとナショナリズム（2009年1月22日）

戦前の沖縄観光をめぐって書かれている次の文は、今に至るまであてはまる部分があるかもしれないと思う。大阪商船の沖縄旅行団募集文からの引用だ。

「日本の内地でありながら遠く南に偏在するため、独特の南洋情緒を湛えている沖縄島」

これについて著者は次のように述べる。

「この情緒は、日本というナショナルな同質性と、その南端という異質性が両立することで醸し出される」P
43

長い間、私にとって、ナショナリズムにかかわる問題は、沖縄在住の人々のアイデンティティにかかわる問題、という視覚で考えてきたことだったので、ヤマトウンチュ・ナイチャー・日本人にとっての「ナショナリズムと沖縄」というアプローチには新鮮さを感じた。その意味では、戦後の今日に至るまで、本土からの沖縄へのツ

ーリストのまなざしについての叙述にも興味をそそる点が多かった。

この本は、本土からの沖縄へのツーリストにかかわるものなのだ。「外国」からのツーリストではない。また、沖縄に住む人々が、沖縄内を旅行するツーリストではない。あるいは沖縄から本土にでかける際のツーリストではない。

だから、この本は、「本土にアイデンティティをもつ人々が沖縄を旅行する」ツーリストのまなざしの分析が主要なのだ。

話はまったく別のこと。

今日、突然の来客があった。10年ぶり近くにお会いする、本土からのツーリストだ。その際に、「浅野さん、東京に帰ることがあるんですか」と尋ねられた。

ずいぶん違和感を覚えた。そういうような考え方をしたことがないので、「エーッ」という感じだった。本土からのツーリストの方々には、私のように本土から沖縄に移住した人に対して、「本土に帰る」という表現がごく自然なのだろう。でも、私の感覚にはそうしたものが消失している。私にとっては「東京に行く」「本土に行く」なのだ。

多田本3 貧困イメージと「古きよき琉球へのロマン主義」(2009年1月22日)

小間切れの感じだが、この本で興味を感じた箇所、それをきっかけに考えたことなどを連載していく。今回は、次に示す、戦前、朝日新聞記者が書いたものとそれについての著者のコメントの箇所だ。

『政治的、社会的、経済的には、一日も早く他府県と伍して見劣りにせぬ沖縄のレベルにまで昇ってもらいたい。観光のアトラクションとしては、いつまでも龍宮を連想する美しい琉球であってほしい』

沖縄の政治経済の改良・振興を求める現実主義と、古きよき琉球へのロマン主義は、ツーリストの意識のなかで、かくも都合よく両立してしまう。いまでも昔も、こういうところは変わっていないようだ。」 P49

著者がいう通り、この両立は今も強くあるようだ。この対比される発想・イメージ自体が、ステロタイプになっているのだが、それに対して、どう考えるのか。ここには深い問題がある。

沖縄の貧困イメージも、本土的まなざし、とくに商品金銭過剰依存的な経済的まなざしからとらえられてきた。他方、ロマン主義的イメージは、超歴史的超社会的なものからとらえられてきた。沖縄の「癒し」イメージにはそうした性格がつきまとう。

こうしたまなざしを本土からくるツーリストがもつのは「事実」としても、沖縄の現実はそのようなイメージに集約されるものとはかなり異なる。

その点にかかわって興味深いのは、戦前何度も沖縄を訪問した社会学者河村只雄についての次の記述だ。

「河村は、辻通いをして琉球を知った気になる観光客に憤りを感じ、琉球への関わり方が肉欲へと特化し完結する、その表層性・一面性の対極に、フィールドワーカーとしての自分を位置づけていた。『より高度な』観光客が他の観光客を批判・揶揄し、自分を彼らと差異化して位置づける営みは、もう当時から行われていたのである。」 P 55

なかなか鋭い。著者からすれば、私なども、ここで「差異化して位置づける」一員にカテゴライズされるのかもしれない。

だが、問題は、「表層的」観光客と河村などの「差異化」する観光客の違いだけにあるのではない。そこから先なのだ。沖縄把握も含めて、ものごとのとらえ方は、ある種のイメージをもとにはじまることが多い。そのもとにしたイメージをどのように展開変化させていくかなのだ。

もう一つ。観光客が提供する沖縄イメージと、沖縄の内からのイメージ創造との関係にかかわる、次のような指摘だ。

「柳田ら中央の研究者による一国民俗学と、地元研究者による郷土研究とは、相互に補完し合っていた。柳田が、異民族・異文化を扱うエスノロジー（民族学）と差異化して、フォークロア（民俗学）を独立分野として立ち上げるとき、地元民の内側からの自発的な郷土理解という要素は必要不可欠だった。」 P 68～9

「外と内」との交流・協同・刺激しあいが、沖縄にかかわる研究・認識を発展させてきたことは重要な事実である。問題は、それぞれ相互が、他者に対してどのようなイメージ・関係をもっていたかによって、大きく異なることだ。

ちなみに、私個人の体験と主張でいうと、沖縄教育界は、本土教育界に対して、絶対的といえるほど「上」に見て対応する体質を濃厚にもち、「内」からの自律的展開のなかに、「本土」教育界を活用していくという姿勢の欠落・希薄を強く問題にしたのは、1970、80年代であった。

多田本4 「愛郷心を通して愛国心を示す」（2009年1月23日）

本書は、戦前期において鍵となる人物として島袋源一郎をとりあげて、いろいろと興味深い指摘を行っている。まず一つだけ指摘しておこう。「26歳で校長に抜てきされた」とあるが、彼が校長になったころの明治末から大正期はじめの時期に、沖縄師範学校を卒業したものが20代で校長になる事例はありふれていたことだけは指摘しておきたい。

彼のように沖縄師範学校を卒業したウチナーンチュウが、明治後期より、徐々に沖縄の教育界、場合によっては地域政治界のリーダーになっていく。その一人である彼は、「愛郷心を通して愛国心を示す」という小見出しに使われるような活動を推進する人物であり、昭和はじめに広く推進された沖縄の郷土教育の重要な人物であり、沖縄教育界・言論界のリーダー的役割を果たした一人であった。

その彼が、改姓運動の「発案者・主唱者」でありつつ、沖縄の「郷土史の知識を普及」させていく。このこと

と関連して、島袋の「沖縄と琉球の使い分け」などの「ダブルスタンダード」が指摘され、「沖縄・琉球」「生活・観光」「地元民・観光客」という「リアリティの二重性が並立する事態」が述べられる。

こうした構図は、今日に至るまで、教員層を含めて「沖縄の知識人」によくみられる。そしてそれは、「沖縄的なものの良さ」を強調すると同時に、本土基準にして「沖縄の遅れ」を指摘し、「本土に追いつく」ことを主張するという形で、今なお沖縄の教育界で支配的な発想構図でありさえする。

こうしたことをどのように分析するのか、100年来の課題ともいえよう。こうした問題にかかわって、著者は次のように述べる。

「島袋は明らかに、本土観光客のまなざしを内面化した形で、沖縄を美的に描き出している。沖縄が貧困に苦しむ暗い時代に、彼がここまでポジティブな沖縄イメージを演出して語れたのは、相手を観光客に設定したからだろう。こうした沖縄への観光のまなざしを確立するとともに、そうした外からのまなざしを内にはね返らせ、地元民が郷土を愛するまなざしにも活用する作業が、同時に行われていたのである。」P77

興味深い指摘であるが、一点だけ私なりの指摘をしておきたい。「沖縄が貧困に苦しむ暗い時代」という点にかかわってである。著者は、いつの時代のどのような事態を指して、このことをのべているのだろうか。こうした表現は、長い間、頻繁に使われ、今日なお「決まり文句」に似たものさえなっている。いわば「沖縄の貧困イメージ・暗いイメージ」とさえいえるものだ。

著者は1940年の沖縄方言論争についても分析を深める。興味深い点が多い。そこで一点だけ指摘しておく。

「沖縄の人びとが憤慨し違和感をもったのは、柳ら中央インテリ文化人たちの、観光客的な沖縄へのまなざしと語り口に対してであった。『素晴らしい、美しい日本古来の文化がここにある』と、柳らがどれだけ言葉を尽くして沖縄をほめようと、彼らが沖縄を外から客観的に見て、上から批評していた姿勢は明らかであり、生活者の視点にはほど遠かった」P83~4

興味深いのだが、沖縄側についていうときに、「沖縄の人びと」「生活者の視点」という言葉が、誰を指すのか、ということに私はこだわる。というのは、この論争において発言した沖縄側の人びとは、教育界を含めて、沖縄のインテリ文化人だったのであり、「沖縄の人びと」「生活者」のなかでは、かなり絞られた方々であるからだ。

もっとも、この書は、観光客の沖縄イメージを問題にしているのであり、「沖縄内部」の側を主要対象としてはいない。だから、ここでは、これ以上深入りしないでおこう。

この問題に私が触れる一つの理由は、沖縄の「生活者」「人びと」の多くは、方言矯正強制・改姓「指導」に、公的な形での異議申し立てをしなかったとしても、生活レベルでは、それほど従ってこなかった、ということがあるからである。

また、首里王府時代の前史をふまえて、明治期以降形成確立されてきた、沖縄「指導層」をどう分析していくか、そのことに私自身の一つのモチーフがあるから、こうした点にこだわるのだ。それは今日の問題でもある。その「指導層」形成にあって、島袋がそうであるように教育界がきわめて重要な位置を占めてきたからだ。

こんな一節がある。

「六〇年代の戦争沖縄病も、今日のリゾート沖縄病も、沖縄に『癒し』に行く点では共通している。罪責感であれ南の楽園であれ、弱者・周縁を領有（植民地化）することによって。」 P 105

鋭い指摘である。この指摘をヒントに、私なりにいくつかのことをのべよう。

沖縄旅行をして沖縄病にかかる前、つまり沖縄旅行以前では、多くの人は、沖縄についての限られた認識、しかも、偏見・差別を含んだ認識をもちやすい。今日では、多少は「薄れている」とはいえ、そういうものを持っている方が普通だ。だから、沖縄訪問をして、「意外に便利だ」「亜熱帯で美しいけど、結構同じような植物がある」「ウチナーグチが中心だと思ったけど、結構標準語が通じるんだ」「沖縄も日本なんだ」などの感想を聞くことが結構あった。今でもそれに近い感想を聞くこともある。

20数年前、ウチナーンチュとの結婚話があり、そのことの相談もあって東京から来たある女性は、「東京の人は、こんなお菓子が好きなんです」と私に手土産を渡した。そこには、上品な東京の人が、そういうお菓子を知らない沖縄の人にあげるといふ雰囲気がにじんでいた。

偏見・差別の変形としての、非対称的な「同情」つまり「憐れみ」は、よく出会うものだ。

余談だが、私たちのように、ウチナーンチュとヤマトンチュの結婚は、40年近く前では、沖縄に対する偏見・差別意識の関門を多少なりともくぐりぬけなくてはならなかった。「沖縄人は人種が違う」とさえもいわれて、大喧嘩をしたこともあった。

そうした偏見・差別意識をもって沖縄旅行した人が、「罪責感であれ南の楽園であれ、弱者・周縁を領有（植民地化）する」形をとりつつも、それまでの沖縄認識の変更を含んで沖縄認識を一步すすめることも事実である。そして、「沖縄病」に「はまる」人も結構いる。

そのところを見事に活用した人がある。主席・知事をつとめた屋良朝苗さんだ。1950年代から60年代にかけて、沖縄教職員会会長として復帰運動の中心的役割を果たしたかれは、沖縄の教師のほとんどが参加する教育研究集会に毎年、本土の著名な人物を招いて記念講演をさせ、かれらを「沖縄病」にかかるように仕向けていったのだ。そして、「復帰運動」の支援者づくりをしたというわけだ。私は、1980年ころ、彼にインタビューしたときに、その「作戦」を聞いた。（浅野誠『沖縄教育の反省と提案』明治図書1983年参照）

この「沖縄病」にかかり、リピーターになっていく人は結構多い。そして、徐々に沖縄の人々の日常生活に触れるなかで、沖縄認識をさらに深め、場合によっては改めていく。なかには移住する人も出てくる。そういうなかで、沖縄の「生活者」として発言する人も出てくる。ここまでくると、ツーリストではない。多文化共生状態、あるいはそれを越えて、沖縄づくりの共同の担い手になってくる。

こういうプロセスのなかで、沖縄以前に抱えていた「傷」などを「癒し」ていく人はかなりいるのも事実だ。数日の沖縄旅行での「癒し」とは、かなり異なる。

「癒し」を批判するのはたやすいが、その「癒し」の内実にまで入って、考えていく必要があると、私は思う。

こんなステップの最初の一つとして、「問題」を含みつつも「沖縄病」があるのではなからうか。その「沖縄病」

は、いずれ「治る」のだが、対照的なタイプがある。沖縄の生活者になっていく人と、沖縄の「あら」「欠点」が見えてきて、沖縄から去っていく人とである。

ところで、私のように、ウチナンチュと結婚したヤマトウンチュ、しかも沖縄に住んでいるものは、かなり早くからツーリストではない。長く沖縄に住むヤマトウンチュでも、沖縄のなかのヤマト的世界が大部分を占める場所で住む人は、ツーリストに似たまなざしを残すことが多いが、彼らとはかなり異なる日常生活を営むことになる。

どんどん話が広がりそうなので、このあたりでやめよう。

多田本6 イメージ消費 脱線話—観光でないツーリストたち（2009年1月25日）

1970年代、沖縄はイメージ消費の観光対象へと変化していくといった指摘が行われる。たとえば、「電通」が設定した『ファンタジア沖縄』は、まさに沖縄版『ディスカバー・ジャパン』であり、『『青い海』『白い砂浜』『ビキニの女性』というイメージの三種の神器が定番』となっていく。そして『『沖縄に行けば、何かがおこるかもしれない』という「漠然とした未来への期待・幻想を高めさせる」のである。それはまた、『日本のなかにながら異質な亜熱帯としての沖縄』というイメージと結びついていた。

こうした動向は、日本全体の「観光」の動向と重なる。「観光のまなざしはビジュアル・メディアと連動して、『国土』の風景をイメージ消費の対象にすると同時に、若い女性層から他の層も巻き込む形で、『国民』をもイメージの消費者として再編していった。」P116とのべられる。

注目したいのは、「沖縄キャンペーンは、観光客だけに向けられたものではなく、県民に『沖縄県民』としての意識を促すキャンペーンでもあった」という指摘である。それは、次の指摘へと連なっていく。

「六〇年代の戦跡中心の沖縄観光が、大きく組みかえられてゆく。沖縄キャンペーンは、沖縄の歴史・文化や県民を、観光振興に適合させようとした。あるがままの沖縄を外にアピールするのではなく、演出したいイメージに合わせて新たに沖縄を構築していく、県内向けの能動的な機能も持ち合わせていた」P143~4

こうしたなかで、ニライカナイ信仰にかかわって、「海洋博において導入された、海をまなざす純粋な視覚的快楽のフレームは、こうした信仰とは無関連かつ対照的に、海洋レクリエーションへの欲望を呼び起こす。沖縄のローカルな歴史・伝統に根を張った信仰・価値観から、本部の海の風景を美的なイメージとして切り離し、観光のまなざしのオブジェへと変えてしまう。」P121 注目すべき指摘である。

久高島、斎場御嶽など東廻りの聖地を多くもつ、私が住む知念半島では、こうした「観光のまなざしのオブジェ」化は、この時期ではなく、近年になってすすむようになった。斎場御嶽などは、1980年代では、草をかき分けて、ハブがでないかと気遣いながらいく所であった。70年代半ばにはじめて訪れた久高島は、馬天港からポンポン船に乗ってでかけるところだった。幸か不幸か、時期的に遅れたためにか、オブジェ化された観光とは少し距離をおいた「癒し」の「聖地」的性格を、いまなお多分に持っている。その意味では、本島西海岸や本部とは異なったイメージで訪問するツーリストの場となった。いまでも、というか今でこそというか、信仰的世界と結びついた「癒し」イメージのなかで訪れる人、リピーターや移住的性格を濃厚にもった人が訪れる場とな

っている。

そうした性格が一層濃厚なのは、しばらく前に訪問した宮古の大神島だ。

今回は、本とは直接のかかわりがない脱線話が多くなる。

こうした「信仰」「癒し」の問題と並んで、「復帰運動」「平和運動」などにかかわって沖縄を訪問するツーリストについての分析が必要だろう。さまざまな集会の開催や運動交流の展開のなかで、沖縄を訪れる人は、60年代以降、かなりの数にのぼると思う。それらを著者がどう分析するのだろうか。尋ねてみたいことだ。

「復帰」前は、パスポートと高等弁務官が発行するビザの取得が必要であり、かなりの人が発行拒否にあっていた。私の知人にもいる。私の個人体験でいうと、1971年に結婚準備と就職活動のために沖縄を訪問した。その際、私は「渡航目的」をそのまま手書きで書こうとしたら、旅行社の人からおしとどめられて、「観光目的」にしてタイプライターで記入することを強力に勧められた。ともかく沖縄に行く必要に迫られていた私はそれに従った。

だから、私のみならず、多くのツーリストが、沖縄の「政治的状況」に強い衝撃をうけつつ訪問しているだろう。そのことは、復帰後においても、形を変えて続いている。そして、その沖縄の政治的状況を意識しつつ、沖縄にくるツーリストも多い。沖縄修学旅行にも、たんなる「観光」ではなく、「沖縄学習」的性格を濃厚に持たせようとする近年の動向には、このような伏線があるとみてはどうだろう。

このような「沖縄学習」的性格と「観光」的性格を入り混じらせながらくるツーリストをいかに分析するのだろうか、そのことも興味ある問題だろう。

もう一つ脱線話を書こう。

大学関係でいうと、1970年代に沖縄にくる本土出身者には、学生と教員がいる。かれらの多くには、「沖縄こそ行きたかった」というプラスイメージと、「沖縄に来るしかなかった」というマイナスイメージのいずれか、または両者が入り混じって存在していた。両者ともに、著者がいう「異質」なものへの反応があり、「異質」への対応にプラスマイナス双方があったともいえる。

マイナスイメージには、沖縄への差別感覚が含まれていたが、それには、後には「偏差値」といわれるようになった「序列」意識と結びついていた。それは、70年代末に「沖縄の学力問題」として、爆発的関心を引き起こしたことも関係があろう。そしてそこには、著者が言及している、沖縄の外からのイメージが、内からのイメージの「構築」に結びついていたともいえよう。

多田本7 沖縄の「内と外」 「沖縄ブームから沖縄スタイルへ」

(2009年1月26日)

この本の第6章「ツーリストの目線の逆用」は、1980-2000年を対象にしている。沖縄に来るツーリストが大量になるなかで、新しい事態がでてくる。苦いと嫌われていたゴーヤが好かれはじめたように、「メディ

アの健康言説が、沖縄料理の味覚評価をコロッと変え」る事態、それと似たいろいろな事態が書かれている。

そうしたことをめぐる多様な指摘のなかで、以下の記述は私の興味をひいた。

「情報環境が高度化するな、沖縄イメージはいまや『本土と沖縄』『内と外』の二項対立的な区分を超えて広がり、その区分自体を一方では脱・分化していく。ツーリストと地元、両者のまなざしは互いに、幾重にも媒介されている。リピーターの増大や移住がブームとなるなか、ツーリストも生活者の視点やライフスタイルを徐々に身につけていく。私はこれを、『沖縄ブーム』から『沖縄スタイルへ』の変容と読んでいる。それは『非日常の日常化』であり」 P156～7

「脱・分化」「沖縄ブームから沖縄スタイル」という二つの指摘。それは、あえていうと、私が言ってきた「異質協同」過程の進行という面をもつ。だがそれは、「沖縄的なもの」の解消・希薄化というわけでもない。「沖縄的なもの」の新たな創造でもある。それに、「新旧のヤマトンチュ」が参加することも多くなる。

私のように婚姻とか仕事の関係で、沖縄に移住してくるわけではなく、ツーリストから移住者へと移る人が増えてくる。その意味でも、「沖縄ブームから沖縄スタイル」という表現は、うまい。

こうした過程で、沖縄的なものが、ウチナーンチュに新たに「見えてくる」「発見する」ということもある。片や、琉球音楽舞踊のように「古典的なもの」を復活継承しようという動きと、片や「沖縄的なもの」を今日的なスタイルで表現しようというものがでてくる。この本での「沖縄ポップ」といわれているものは、そうしたものだろう。

沖縄の創造的動向は、単なる「ヤマト化」「本土化」という形だけで進行するわけではない。「外」の世界との交流のなかで、多様な文化・まなざしをうけとりつつ、新たな創造へと展開していく。その意味では、「チャンプルー文化」を創造していく。「チャンプルー」文化とは、いろんな文化がチャンプルーされているというのではなく、チャンプルーとして創造しているところに意味・特性がある。それは「新たな沖縄的なものの創造」という性格をももつ。

こうした沖縄の「内」での事態の進行と同時に、沖縄とかかわることを通して、ヤマトンチュが強い刺激を受けて、自らを変えていく過程を生み出していく点についても検討していく必要があるだろう。その意味では、沖縄がヤマトンチュに与える強烈な刺激は一体何であるのかという意識化・分析が重要になるろう。

その際、産業化の過度の進行、そして金銭・商品への過度の依存、また「偏差値」体制の支配が、人々の生活・精神世界にまで深く及ぶなかで、それとは異なるもう一つの生き方・人生を追求したい、という動向の広がり深まりを視野に入れる必要があるだろう。そして、そうした文脈のなかでの「癒し」への渴望と、「沖縄」での「癒しの実現」ということもかかわってくる。

さらにその際、こうした問題が、「沖縄」「ウチナーンチュ」の世界では、「本土」ほどに意識化されていないことは、一体何なのだろうか、という問いもでてこよう。

多田本8 沖縄イメージ ちゅらさん モンパチ 琉球 (2009年1月27日)

「太田昌秀の『沖縄の心』からモンパチの『琉球の心』へ」というタイトルの第八章は、2000年以降を扱う。そのなかに、こんな記述がある。

『ちゅらさん』とモンパチの県内オーディエンスには共通して、『本来の、これぞまさに沖縄』と、『昔ながらの、古きよき沖縄』という沖縄イメージが見出され、オーセンティシティとノスタルジアが結びついたまなざしが浮かび上がってきた」P224

『ちゅらさん』は私も見たが、モンパチは、米軍ヘリコプター墜落事故にかかわって、沖縄大出身の歌手グループがコンサートするということを知った名前しかわからない。そのモンパチは若者にすごく人気があるようだ。

この章は、若者のもつ沖縄イメージに焦点があたっている。

「独特の異化効果を発揮する」「琉球」という言葉にかかわって分析を行い、次のように書かれる。

『琉球』という言葉は、日本やアメリカが入ってくる前の、純粋型としての琉球王朝、「昔の沖縄」へのノスタルジアを呼び起こす。」と書き、モンパチの『琉球愛歌』などについて『古きよき沖縄』を歌っていて、新鮮だった」というアンケートの記述を紹介している。

そして「これは、『ちゅらさん』の調査で四〇代以上の世代に見られた、過去の記憶にもとづくノスタルジアとも異なる。コアな層は『昔の沖縄』を知らない一〇～二〇代、それも『琉球』だ。誰もその時代を生きていない。より幻想性の強い、イメージ準拠型のノスタルジアだ」と分析している。

そうした「いまの沖縄の若者の感性」は、『濃すぎる沖縄』を嫌い、『対本土』にこだわらない、『自然でありのまま』の沖縄を受け入れるリスナー」だという。若者感覚に疎い私には、参考になる指摘だ。それだけに、そうした若者が、かれらのもつ「沖縄イメージ」を今後どのように展開していくのだろうか。あえていうと、創造していくのだろうか。

そこに注目したい。四〇代以上が、「政治」的感覚も含めた、生活体験的な「記憶」をもとに、「古きよき沖縄」へのノスタルジアを語るとしたら、一〇～二〇代は、今もつ「イメージ準拠型のノスタルジア」を、どのような生活感覚をもとにして、今後さらに築き上げていくのだろうか。私自身の願いというか、強い関心としてある、「現代の沖縄の若者が、どのような沖縄起こしをしていくのか」というテーマとかかかって、今後考えていきたい問題である。

また、それは『自然でありのまま』の沖縄を受け入れる」感覚、いいかたをかえれば、「なんくる」であるのだが、「なんくる」がどのようなものとして形をあらわしていくのだろうか。

多田本9 観光はいったん否定されることを通して受け入れられる

(2009年1月28日)

長くなった連載もいよいよ最後だ。第9章「八重山の現在」と終章「沖縄と日本」では、沖縄の観光のあり方が追求される。そのなかで、印象深い点をいくつか紹介しよう。

裏石垣での移住者にかかわって、『移住者による、北部海岸線のコロニアルでロハスな領有』なるものが、ウチナーとヤマトの長い非対称的な力関係の歴史によって基礎づけられた、無意識の植民地主義を含んだものだとしたら？」という問いかけ。

私も同じような疑問を感じることもある。一泊費用だけで、沖縄では一カ月暮らせるほどの高額で泊まるリゾートホテルが広がっている。そうした富裕層のツーリストたち、そしてそれにつらなる形での移住。「自然の収奪」としかいえそうにない観光。私がいう「人々とつながる」を脱落させた移住にもそれを感じることもある。

そうした観光・移住は、八重山や本島西海岸にしばしば見られるが、私の住む南城市内では、なぜか、そうしたケースは少ない。それだけに観光上の収入が少ないかもしれない。

「自然保護の立場から開発反対」を主張する「先駆的移住民」という表現がでてくる。3～4年前、浜川御嶽周辺の開発計画が現実化しそうな時、それらを意識して、宮本亜門さんなどの呼びかけによって「島や宝」コンサートが行われた。その折、私は、竹富島の経験をもとにして、そこからの報告などの企画があってもいいのではないかと提案したことがある。そして、実際、感動的な生活芸能が披露されるとともに、竹富を「守っている」ことについてのとても印象的な語りがあった。

その竹富について、著者は「竹富島はまさに観光で生計を立てている島でありながら、その芸能や祭りは、世俗的な観光化を周到に遠ざけることで、伝統的な価値を保っている」と指摘される。また、「世俗化して価値が下がるのが『観光』だ。だから、いったん観光を否定することによって、観光的価値、真正さが保持される効果がある」とも述べられる。

石垣市風景計画策定の中心人物へのインタビューをもとに、「風景計画を通して、今日の移住ブームやミニバブルの時代に、観光客優先から市民優位へと、石垣市民の側から島の観光や景観を領有し返す方向を目指している。」という発言の紹介も注目される。そういうなかで、「内発的観光」「持続的観光」への展開が語られる。また、「グリーンツーリズムと特産品販売」という方向も紹介される。こうした動向がすでに八重山で見られるが、その点では、南城市でこうした問題に関心をもつ人たちのなかでいわれている体験滞在型観光の追求とほぼ重なる。このように、ツーリストも移住者も、地元の人々とながら共同創造をしていく方向へとシフトする観光が追求されはじめている。

ところで、移住者についていうと、この本では、ツーリストの文脈の展開としての移住者という視点で語られることが多い。裏石垣などではそうである人が多いだろうが、沖縄本島ではそうとは限らない。結婚・仕事の関係で移住する人がかなり存在する。また、最初はツーリストだったかもしれないが、沖縄での生きがいを見出した移住者が、とくに20代、30代のなかに多い。私周辺にそうした人たちがたくさんいる。

私のこのブログは、「沖縄移住」のカテゴリーにも登録しているのだが、その「沖縄移住」カテゴリーのブログを見ると、そういうタイプの移住者がかなり多い。新たな生き方をつくりだしつつあるのだ。それは「ロハスの領有」とは対照的ではある。

余談だが、ロハスが関心を呼んで、琉球放送テレビの夕方番組「気ままなロハス」がかなり視聴されているようだ。この番組に登場してくるケースには「ロハスを領有」できる富裕層はきわめて少なく、むしろ地球にやさしい生き方と自分の生き方の転換創造を求めるケースが大変多い。そうした形のロハスを追求する移住者には、次のような背景を見る人が多い。

沖縄へのツーリストが量的に激増した70年代半ば以降は、実は本土の都市社会が、企業社会として「成熟」し、働きバチ、レールにのっかかった競争的な生き方が一般化した。そして、そうしたことから脱出、ないしは距離を置く生き方をする人々が、80年代終わりより、かなりの広がりを見せる。そうした人のなかには、沖縄観光のなかで、「癒し」を感じ、その「癒し」を一時的な「清涼剤」にとどめず、生き方、ライフスタイルとして追求しようとしはじめる。それは、沖縄とは限らない。本土のあちこちの「田舎」がそうした場として選択されはじめた。

その意味では、私は「癒し」を求める人々を肯定的にとらえ、かれらがどのようにその「癒し」を展開していくのかに関心をもつ。おおげさにいうと、金銭・商品依存で、働きバチ的な社会と人生のありようのなかで、「癒し」を求めて沖縄にくることをきっかけに、自分自身の「癒し」だけでなく、「社会」の「癒し」をも追求し、オルタナティブな生き方を、沖縄における生き方のなかに発見するという文脈のなかでとらえたい。このことは、Uターンする沖縄の人々にも広くいいうることだと思う。その点で、この本全体を通して、「癒し」が「表層的」で軽いものにとらえられがちなのは残念だ。

連載の最初でも書いたが、全体的にいろいろと示唆に富む本であった。それだけに連載が長くなってしまった。

いろいろと示唆を受けたが、私はツーリストに関心があるよりも、沖縄に住む人々が、ツーリストや観光に対して、どのように対するか、そしてそれだけでなく、自らの生き方、および沖縄社会のありように対して、どのようにかかわっていくのか、ということに関心をもつ。

この本は、研究者的なまなざしでの論評が基調に流れているが、最後あたりになると、かなり実践にコミットする発言の要素の比重が高くなっている。著者の今後の展開にも注目していきたい。

どんな沖縄イメージを発信するのか (2009年1月29日)

多田本を読んでいて、自分ならどんな沖縄イメージを発信するだろうか、ということを考えさせられた。

多田本は、観光、ツーリストに照準をあわせた沖縄イメージであった。この他にも、いろいろなレベルで沖縄イメージを語るができる。

たとえば、政治経済でいうと、反戦平和、開発、格差、貧困、反権力、差別などの言葉が登場してこよう。

文化でいうと、民謡・舞踊・三線・エイサー、グスク、御嶽などがでてこよう。

自然レベルでいうと、島、珊瑚礁、亜熱帯、台風、……

生活レベルでいうと、ゆったり、のんびり、暖か、サトウキビ、癒し……

他にも、産業レベル、人間関係レベル、教育レベル、生物レベル、などいろいろある。

こんないろいろなレベルを考えていると、興味は尽きない。我が家にも、本土や外国からの訪問者が多い。そんな方たちに、どんな沖縄イメージを提示するのか。というときに、改めて、この沖縄イメージの何を出すのか、

ということを考えさせられることがある。

もう30年以上前になるが、琉球大学の同僚が、大規模な教育研究の集会に参加する本土からの訪問者への、沖縄のプレゼンテーションをするということで、亜熱帯、島、王国、戦争、基地という、「沖縄の五つの顔」を提出した。それをふりかえりながら、今度来る訪問者に何を出そうかなと思いつく。

私の場合、今強調したいのは、たとえば人間関係についてのイメージだ。また、「沖縄起こし」、沖縄をどうしたいのか、という人々の願いのようなもののイメージも提出したい。それらは、いずれも肯定的な方向で考えている。言い換えると、沖縄のもつ豊かさを提出する方向だ。

沖縄は数百年にわたって、否定的イメージを日本・本土から浴びせかけられ、それを内のものとするリーダーたちが強く仕切ってきた歴史があり、そのなかで沖縄の自己認識を否定的なものにする傾向が強かったからだ。

このモチーフは、私が沖縄に住みはじめた1972年から間もないころよりちはじめ、それ以来つづくモチーフだ。このことを強調したのは、『沖縄教育の反省と提案』（1983年明治図書）であった。

少しずつ、私の沖縄研究作業を再開しつつあるが、どのような構想になるのかは、まだまだわからないが、こんなことも考えながら、すすめたいと思っている。

「沖縄の出生率はなぜ高いのか？」（2009年8月23日）

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」（藤原書店2003年）のなかの、具志堅邦子「沖縄の出生率はなぜ高いか？」である。

私は、人口問題にかねてから関心をもっていた。お恥ずかしながら小学生時代、新聞投稿したことがあった。無論採用されなかった。食糧問題・地球環境の視点からだったように記憶している。ベビーブーム時代の直前に生まれた、当時の私にとって、こうした問題に関心をもったのは、ありえたことだろう。

また、1980年代以降、フランスの社会史の刺激もあって、人口問題と産育・教育に関わる研究が急激にすすんだ。それへの関心を強く抱いていたが、まだ何か書くという段階には至っていない。いずれは、沖縄教育史を私なりに書き直そうと思っているが、その時に、この視点は不可欠だ。とくに沖縄での何度かの人口爆発が、産育・教育に何をもたらしたのかの検討は重要だ。

それにしても、戦後の人口爆発の後、沖縄では、他府県ほどの出生率低下はない。その原因はなぜか、そのことをめぐって、この小文は、次のようにわかりやすい説明をしている。

「沖縄も全国と平行に確実に少子化に向け進行しているが、その変化がゆるやかなのは、沖縄が高度経済成長期を経験しなかった経済的特性、楽天性、親族ネットワークの強靱さという文化的特性ゆえのことだと考えられる。」

この小論の中で、もう一つ注目しなくてはならないのは、出生を受け入れ促進する志向・条件を持つタイプと、結婚回避、出生回避のタイプとの「二極化」という指摘だ。

ところで、少子化を否定的なものと考え、政策展開を求める考えがある一方、食糧・地球環境問題の観点も含んで、人口増大を憂える動向もある。また、人口統制の是非にかかわる論議もある。こうしたことにも留意して、

考えていきたい。

魚 昆布 鰹節 じゃこ (2009年8月24日)

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」(藤原書店2003年)のなかの、金城須美子「琉球の食生活と文化」である。当たり前のことかもしれないが、私にとって新鮮な発見をいくつか紹介しよう。

「肉料理に比べて魚介類の料理はめぼしいものがなく、未発達なのも特徴の一つである。現在も生鮮魚の消費量は全国一少ない。」

動物性蛋白質の大部分を魚で摂っている私にとっては、驚きである。1000年以上前は、魚の比重が高かったはずだが、その文化はどうなっているのだろうか。

「昆布の種類は少なく、一般にだし昆布はもちいない。」

だし昆布を使う私には、これまた驚きだ。

「鰹節の購入量は桁違いに多く、全国平均の約7倍である。一方、じゃこの使用は少なく全国最下位である。」鰹節もかなり使うが、じゃこも使う私にとって、これまた驚きだ。

こうして考えると、我が家、というか私の食生活は、沖縄式100%には、かなりの距離がある。

大国と沖縄 (2009年8月24日)

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」(藤原書店2003年)のなかの、多和田真助「『尖閣騒動』と『琉球・領土問題』」である。

まず、引用してみよう。

「琉球・沖縄と日本の関係軸では『完結』を意味しても、中国を加えた三極軸の関係でみると、琉球処分はまだ完結していないということである。1880年の『琉球分割案・外交交渉』は妥結に至るも、いまだ『正式調印』は行われていない。」

このような視点を、これまでの私はずもっていなかった。記憶しておくべき視点であろう。

「沖縄(人)は世代わり(王国の時代—薩摩の侵攻—琉球処分—日本併合—米軍統治—本土復帰)のつど、大国の思惑で右往左往してきたからだ。(中略) 姜尚中いわく。いま日本には国家戦略の過程で仕組まれた「エッジ(境界上)」や「ヘテロトピア(異質な場所)」が存在し、五百万人を超える人々がそうしたところにいる。そのなかで沖縄(人)は一三〇万人を占める。言うまでもなく、沖縄(人)の存在は日本のなかのマイノリティであ

る。姜の指摘とは別に注目しなければならない点があるとすれば、琉球の位置する南西諸島の歴史的・地理的条件は、つねに東アジアの大国（中国・日本）の動きと結びついていたということである。」

この大国には、アメリカもふくめる必要があるだろう。こうした視点をもつと同時に、大国だけでなく、新たな要因が加わってくる可能性も否定できないだろう。国単位ではない要因も、である。多文化協同の可能性にも開いて問題を考えていきたい。

これから先の沖縄にとっては、かなり流動的な状況がうまれる可能性も高い。そのなかで、いかに主体的に歴史を創造していけるか、その力をためていく必要があるだろう。

民族自決と精神 沖縄（2009年8月25日）

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」（藤原書店2003年）のなかの、高良勉「歴史と自決権の奪還」である。

まずは引用しよう。

「私たちの経験によれば、自分史や自民族の歴史を否定された人々は、個性が弱くどこか卑屈で頼りない（最近の日本人もそうだ）。何度も大国の都合によって自己決定権＝自決権を破壊され、運命を翻弄された人々は、未来に対して確信がなく、自己が決めた理念や戦略に向けてコツコツ努力することが苦手で投げやりである。自立心が弱く、他者依存的で、権力や権威を持っている人に弱く「長いものには巻かれる」という事大主義的である。これらを別の言い方をすれば、植民地主義に強制された奴隷根性ともいえるだろう。

この事大主義と奴隷根性こそ私たちの内なる最大の敵である。」

この指摘は、とくにリーダー的存在である人は、「自戒」として留意しておく必要があるだろう。最近の沖縄教育施策を考える時に、思い当たるふしが多い。他者依存的でありがちで、そうしたとき、「じり貧」的状况をうみだしやすい。この文では「自己が決めた理念や戦略に向けてコツコツ努力することが苦手で投げやり」とかかかれているが、むしろ「他者が決めた理念や戦略に向けてコツコツ努力することが得意」といったほうがいいかもしれない。

無論、多文化協同を主張する私は、既存の民族を絶対視し、民族単位でことがらすべてを把握することには、保留する。この論はそうしたものとはいえないだろうし、重要な指摘を多くもっている。また、この論のなかで、民族自決を、分離の自由の視点だけではなく、結合の自由の視点も強調している点が注目される。

自ら全国に「同化」していこうとする発想（2009年8月25日）

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」（藤原書店2003年）のなかの、屋嘉比収「近代沖縄における認識の

変遷」である。

色々と学び、注目したことが多い文だが、特に太田朝敷についての論述について考えたい。それは、かれの考え方は、この時期以降の沖縄教育界のリーダーたちの思考と共通したのがあり、形を変えているにせよ、今日なお強力であるからだ。今日の学力問題などに関わる沖縄教育界の多くのリーダーたちの発言の背後にも、わかりやすい形で存在しているのだ。

では、引用しよう。1903年の「人類館事件」にかかわって書かれた太田の発言にかかわってである。

「明治三十年代前半に沖縄でも徴兵制や土地整理、租税制度など全国同様の法制度が施行されたことを受けて、これからは意識や精神面でも沖縄県民はりっぱな帝国日本の「臣民」や「国民」になるべきだという太田の主張」にかかわってである。

「これからの沖縄は「全国」同様に帝国日本の一県として積極的に「同化」し、日本の「帝国臣民」「国民」として貢献すべきだとする強い主張」であり、

「その背景には、他府県人の沖縄人に対する「種族的差別」を、沖縄県民がりっぱな帝国日本の「臣民」「国民」になることによって乗り越えるべきだとする太田の論理構成がある。言い換えると、沖縄人に対する「種族的差別」を「帝国臣民」としての「ナショナルティー」に同化することで乗り越えようとする志向性だといえよう。」

この太田の発想は、前回取り上げた高良勉の指摘にまさに当てはまる。当時の沖縄の知識人のなかで成立しやすい発想の一つであろう。この文の次節にもでてくるが、明治期の伊波普猷にも共通するものがあつた。そして、今なおもである。「学力テスト全国最下位脱出」という発想にもそれがあらわれている。

その意味では、こうした発想からいかに卒業していくかが、沖縄のリーダー的な知識人にとって共通する課題だともいえよう。

外来物をチャンプルー化し、沖縄独自のものを作り出していくこと(2009年9月8日)

3日の記事で「チャンプルー性」について書いた。沖縄では、外来のものを、沖縄のなかで自ら築いてきたものとチャンプルーにして、沖縄独自のものとして磨きをかけ、より豊かなものを作り出してきた。芸能史をみればよくわかる。芸能史だけではない。いろいろな分野で、である。

しかし、外来のものを、チャンプルー化せずに、外来のものそのままに沖縄のなかにいれこもうとしてきたものがある。そうしたものは、沖縄で根付きにくい。首里王朝時代、そしてまた、天皇制教育システムのなかで追求された、朱子学を中心とする儒学はそうした例だろう。一時流行したステキ文化もそうかもしれない。

それに対して、念仏をふくむ仏教文化の一部は、盆やエイサーという形で、チャンプルー化して沖縄独自のものをつくりだしてきた。

思いつくままに、並べてみよう。

a) チャンプルー化して、沖縄独自なものとして発展してきたもの。

芸能の多くのジャンル

農業・漁業

食事

b) 外来のものをそのまま、沖縄にいれこもうとして苦戦しているもの

漢学(王制時代の学校)

学力テスト

軍隊

a) と b) の中間のもの

ウチナー式ヤマトグチ

芸能のいくつかの分野

沖縄文学

企業経営

王朝時代の筆算稽古所

行政 b) に近いかもしれない

b) が苦戦している理由の中心は、沖縄的なものを排除抑圧し、ゼロにして、それを外来のものに取り換えようとしてきたことにある。

大学をふくめて、沖縄の現在の学校は、どうであろうか。少しはa) を気にしてはいるが、依然として圧倒的にb) に近いままにあるのではないだろうか。こんななか、アメリジアンスクール・イン・オキナワは、a) とb) との中間的状況があるとはいえ、a) 的な要素が高いという点でも注目できよう。

自然・神・心・戦 千葉大学学生の礼状に見る沖縄印象 (2009年12月25日、26日)

11月末に来訪された千葉大学一行の一人ひとりが、感想を中心にお手紙を送ってくださった。有難うございます。

多様な沖縄印象が綴られているので、紹介したい。12月初めのブログ記事「私の玉城案内」にあるような場所を案内したので、よくある感想とは一風異なるかもしれない。また、20歳前後が多数だが、60代の社会人もおられるし、ヨーロッパからの留学生もおられる。

膨大になるので、一部の紹介だけになることをお許しください。また、わかりやすくするために、多少の補いがしてあります。

「先生（浅野のこと）の教え方は知識の伝達に重きを置くのではなく、自分の五感で感じることに重きを置いている点で、すごく興味をもちました。僕は「学ぶ」ということ自体、まず知識を頭の中に入れ、どう考えるかという風に考えていましたが、違うアプローチ方法もあるのかと身を持って感じる事ができたし、何より沖縄の文化・気候を意識して体験できたことが嬉しかったです。最も印象深かったのは拝所へ行って昔の人がどのように神様を信仰したのか考えながら歩いたことです。沖縄の海があるからこそ、緑があるからこそ、太陽があるからこそ、沖縄の信仰がうまれたんだろうなと感じることができました。」

「きれいな海を前にして「ふぁー」とした気持ちになったのですが、御嶽や城を訪れた時は、「ずどーん」と不思議な衝撃を受けました。それが忘れられません。血管のように張り巡らされた木の根、迫力のある岩、青い海から吹く風、太陽の光・・・本当に自分の形を忘れる空間でした。この地で沖縄に古くから住む人々は、何を思っただけで何を感じて生きることと向き合ってきたのか、なぜ今これほど『沖縄』が人を惹きつけるのか、ますます興味が湧いてきました。」

「一番印象に残っているのは、海沿いにそびえ立つ岩場です。太陽が差し込み、人のオーラが見えるとおっしゃっていた場所です。何か大きな力を感じました。浅野先生宅で淹れてもらったハーブティーの鼻を抜けるような味も忘れられません。」

「心が穏やかになると言いますか、心が洗われると言いますか・・・大きな力があるのは間違いないと感じました。自然の中にたくさんの神がいるから、心を満たしてくれるとおもいますし、美しい自然が生き生きと生命を感じさせてくれるのではないかと思います。」

「グスク跡は私が勝手に思い描いていたものとは違って、目の前には壮大な景色が広がっており、あたたかい日差しがさしこんでいてとても居心地の良い場所だなあと感じました。神聖霊域とされていたとても根・幹のふとい大木には圧巻でした。」

「ご案内いただいた地では、自然の大きさと今も人々の心に残る傷あとを深く心にきざみました。」

「前日までの3日間で、ガマなど沖縄戦にまつわる場所を訪れたり、琉球大学の学生と交流を持つなかで、色々沖縄の歴史について考え、今も残る沖縄戦の名残やウチナーとナイチの意識の差など、沖縄の今まで知らなかった部分を目の当たりにして自分の意識の低さに落ち込んだりしていたのですが、4日目に浅野先生が案内してくれた御嶽、ウガンジョをはじめ、ただの観光では絶対に行けないような沖縄の自然に触れて、暗い過去があってもそれを強く乗り越え魅力を取り戻した沖縄を感じて、暗い気分が晴れました。私も今回の経験や感じたことを風化させず、未来につなげていきたいと思います。ガジュマルの大木には本当にパワーをもらいました。」

「生と死の狭間」・・・「私とその境界に立ち、最初に思ったのは“見晴らしが良くて、風が気持ちいいなあ”でした。その後先生にあの場所の正体を教えて頂き、当時の人間はこの風をどう感じていただろうか、と考えまし

た。そんな物に払う余裕など無かったかも知れない。私は嗅いだことが無いけれど、血と硝煙と生き物の焼ける臭いしかなかったかもしれない。」

「のどかな自然のなかで、戦争が起きたとは信じられなかったです。」

「佐喜間美術館、糸数壕、平和祈念資料館など戦争の歴史を物語るさまざまな施設を訪れて、平和を掲げる日本になぜ「戦」というコトバが必要なのだろうかと疑問に思いました。浅野先生に案内していただいた城の跡から見下ろした沖縄の青く美しい海を見たとき、自分はなんて小さな人間なんだろうか、何もできない戦争に対して安易な考えしかもてていなかったのですごく悔しくなりました。」

Momoto モモト・・・新刊雑誌（2010年2月3日）

1月創刊の雑誌。新聞でも紹介されていた。編集スタッフの中心二人が知人ということもあって、書店で買った。ふだんの生活では、こういう雑誌は読まないが、縁あって購入したというわけだ。

いくつか印象

- ・女性が中心になっており、女性の視線を強く感じる。だが、女性誌というわけではない。
- ・生活感あふれる。と同時に社会派的雰囲気も濃厚だ。
- ・沖縄にこだわった主張を感じる。
- ・ちなみに、恵美子が興味を抱いた一つは「火又神。100」。
- ・その沖縄のなかで、生活を、人生を、そして沖縄そのものを創っていかうという意気込みを感じる。それには、これまでのジャーナリズムというか、マスコミとはやや異なるトーンを帯びている。「古さ」が出始めている私などにも刺激を与えそうだ。
- ・ヤマトンチュウとウチナンチュウの合作という感じ。
- ・実に多様な記事、短い記事がちりばめられている。重そうなテーマもアクセスしやすい。
- ・写真を始め、デザインが美しい。



これだけの雑誌を消費税込1000円でやっていくのは大変だろう。継続発展を期待する。

12. 移民移住・多文化・バイリンガル

移住・交流の視点から沖縄をとらえると（2007年1月29日）

網野善彦「日本中世に何が起きたか」（洋泉社2006年）を読みつつ、触発して考えたことである。

以下のような「常識」的把握がある。近世の集権型統治は定着農業を軸に展開された。近代にはいると、その近世支配を基盤に、定住することを前提に人々を国家が統制管理してきた。そこで、人々は代々にわたって定住してきたという観念が人々の意識のなかに定着してきた。

以上のような把握に、私自身も深くとらわれてきた。だから、たとえば、沖縄で区域外との多少の交流・移住があったとしても、主流は港川人からずっと続いてきた沖縄人だという観念が長い間支配してきた。港川人とまで遡らなくとも、1000年以上、2000年は代々継続してきたのであり、それが沖縄人だという観念が、証拠もなしに所持してきた。

ところが、東アジア社会における流動、そして多様な交流・移住が展開されたという視点から沖縄をみると、この1000～2000年の間にも実に多様な交流・移住があったことが容易に推定できる。そしてまた、沖縄人を一様な人々の集団であったととえらることに疑いをいれる必要がでてくる。先島と沖縄本島とはかなり異なることは知られつつある。加えて沖縄本島内でも多様な移住者がいると推理することも可能だろう。中国からの移住者である久米村の人のことはよく知られているが、他にもいるかもしれない。近年の発掘調査のなかで、中国製陶磁器が多く出土するが、それが交易によってもたらされたとだけみるのではなく、移住がともなっていたという視点からも検討が必要な場合もあろう。

そんなことを、たとえば玉城間切―玉城村ということに限定してみても、多様な移住・交流を推察することができる。以下列挙しよう。

- ・隣の具志頭村の博物館は、港川原人の遺跡を紹介している点で注目されるが、そのなかに、字具志頭、字長毛、字港川の言葉がかなり相違していることを紹介するコーナーがある。屋取で首里言葉の長毛、漁業で糸満言葉を含む港川と「地元」といえるかもしれない具志頭言葉の違いは、私にもよくわかる。

- ・同じことを玉城でいうと、漁業集落である奥武、農業集落である中山、屋取を含む玉城の三つでは、かなり異なるものがある。まだ詳しくはいえないが、私の目からも違いを感じることもある。

- ・そうした多様さを含んだ玉城などの間切において、首里王朝は中央集権体制の一環としての地方支配を整備していったはずである。そしてそれは農業集落を「モデル」として展開したといえよう。

- ・その整備過程で、住民集団を移住させることもした。また、屋取のように18～19世紀に移住してきた人がいる。

- ・20世紀にはいるころから、玉城から本土や外国へ移住する人々もかなりでてくる。戦後では、八重山に移住する人も多い。

- ・もっとさかのぼると、1000年ぐらい前、ないしはそれ以上前に、沖縄島の外部から大量に移住してき

た人々の重要部分が、玉城経由で上陸したと推定することは可能であり、そうしたものとしてヤハラヅカサを見ることができなくもない。

・久高島には、その祖先は玉城からきたという言い伝えもある。

・海産物が豊富な玉城あたりは、採集民がいただろうが、そこに移住してきた農業民との関係はどのようなものであったのだろうか。

・1000～2000年以前は、本土との交易が盛んであったことはよく知られているが、それに携わる人々が一定の集団を形成していたとも考えられる。

・13～15世紀あたりは、東アジア世界全体とつながる交易があったことがよくいわれるが、その過程での移住などはどうであったのだろうか。

こんな風に考えてくると、閉鎖的な島社会ではなくて、実に多様な交流・移住が行われてきた開放的な島として、沖縄をとらえることが容易であろう。沖縄把握の場合には、そうした交流・移住、およびその促進統制ということ視野にいれる必要がある。そしてそうしたものを考える際に、王朝・有力者レベルだけでなく、もっと多様な集団レベルでの視点も必要であろう。そうした場合に、たとえば漁民がどのようなかかわりをもっていたのかは、一つの注目点である。また、交易品の生産・流通にかかわる商工業民がどうなのか、ということもある。

もっと脱線して、想像をたくましくすれば、沖縄の芸能・文化には農業関連行事とかかわるものと、交流・移住を契機にしたものが並存・混合しているのかもしれない。念仏踊りの流れをくむエイサーなどはどういう性格をもつのだろうか。網野さんは、浄土宗、浄土真宗、時宗などは、都市的住民の大量存在とかかわりがあると述べているが、そうした視点から考えると興味深いかもしれない。

さらに下って、沖縄からの海外への移住者の逞しい活躍をどうみるのか。また逆に近年の沖縄への大量の移住者をどうみるのか。そうした移住に対して、沖縄は閉鎖的性格をもって対応するよりも、開放的に交流促進をもつての対応という性格が強いように思われる。

こうして考えてくると、沖縄を見る場合に、定着・継承という契機と、交流・移住・流動という契機とを合わせもつ必要がある。そしてその両者に王朝や国家統制がどのようにかかわったのか、それを「くぐり抜ける」動きがどうだったのか、をも見る必要がある。

そのことは教育にかかわっても考える必要がある。沖縄の場合、意図的組織的な教育、学校を中心とする教育は、王朝・国家を抜きにしては語りえないのだが、それが交流・移住・流動という契機と定着・継承の契機という契機をどのようにからませたのだろうか。それに対して、王朝・国家の教育とは関係なしに、あるいは「くぐり抜ける」ように展開した教育はどうであったのだろうか。こんな視点から検討してみる必要があるように思う。

多文化のなかで生きる 安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン』（クバプロ2007年）を読む（2007年6月20日）

移民・移住の関心をもってきたが、さらに「多文化」のなかで生きることをめぐっても以前から関心をもってきた。この本は、こうした問題を、体験者の語りをも含んで論じられた本である。そして、ホスト社会としての

沖縄社会の問題性・課題を提示する本である。

「多文化」というくり方をしたのは、1990年代から関心をもってきた多文化主義教育を想起してのことである。多文化という表現でくくるのが妥当かどうかは、今後の追究のなかで判明してくることだろう、と思う。

注目した記述を抜き書きし、若干のコメントをしておこう。抜き書きの冒頭は、執筆者名である。名がないものは、Q&Aの記事で無署名のものである。

(1) 移民

関根政美 日本への移民 二百万人前後 移民の数はOECD諸国でもアメリカ、カナダ、オーストラリアをのぞくとトップ5~6に入ります。移民大国であることをまず認識する必要があります。そして、沖縄には七千人から八千人ほどの移民がいるという認識も必要です。 P124

帰還移民研究

アメリカンや台湾出身者で中産階級に属する人たちがいる 最近の移民研究では、高給職移民には問題がなく、3K職種に就く人たちが問題だという議論がありますが、それも怪しいように思います。外国から来た場合、みんな苦勞していることがわかりました。 P125

オーストラリアでの経験 最近では、移民の第二世代の人たちが自ら勉強してソーシャルワーカーになったりして、彼らがすべてをやっています。彼ら・彼女らが金をくれと要求し、時には行政と喧嘩して、実際に困っている人を助けています。(中略)これからは長期的な観点にたった行政サービスをしながら、そのような人たちをどうやって養成していくかが問題です。それには、大学教育、学校教育も非常に重要です。行政になんでもかんでも押し付けるのではなくて(どうせできないんだから)、自らやっていく、もしくは日本人のボランティア活動を活用していくべきです。その際に、行政と移民の人たちを結ぶリーダーシップをとる、一種のミドルマン(インフォーマド)のような人が必要だと感じました。外国から来た人や日系の人など、外国の文化を身につけている人たちの個性や文化をできるかぎりそのまま活かしていくような社会が、多文化社会だと思います。そのような社会をどうやって作るか、その方法論がこの研究からでてくるとうれしいと思います。 P126

野入 沖縄の外国人について、「米兵は基地があるからほっといても大丈夫。日系人は親戚がみるから大丈夫。行政は別に何もなくていいんです」とおっしゃる方がおられます。沖縄以外の都道府県は外国人問題で大変で、沖縄は大丈夫、共生できているという思い込みは、少し違うということを、現実から明らかにしていくことを私たちはやろうとしてきました。 P127~8

浅野メモ-----この問題は、沖縄から本土に行った人々、あるいは本土から沖縄に来た人々(それには、ヤマトウンチャー、ナイチャーといわれる人、そうではあるとしてもさらに自他ともにウチトウンチャー、シマナイチャーと呼ぶ人)でもみられる問題である。

その際、さらに支配的「位置」にいる人、支配的「文化」をもつ人と、そうでない人との非対称的關係という視点も必要だろう。

また、「ミドルマン」という存在の強調にも注目したい。これは、私がいつてきた用語でいうと、異質協同の

コーディネイターということであろう。

(2) ハイブリディティ

野入 国吉さんの報告では、沖縄の文化と南米の文化のハイブリディティが沖縄の人にあまり評価されていません。でも、私の報告では、台湾の人はそれを誇りに思っています。(中略)台湾は地理的にも沖縄と非常に近く、植民地時代に沖縄から台湾にいて住んでいた方もおられます。台湾生まれの沖縄の方もたくさんおられます。心象地理的にも台湾と沖縄は近いと思います。アメリカ文化は私たちの生活の隅々にまで浸透していますし、その点でいうと南米の文化は地理的にもそうですが、沖縄の人にとってハイブリディティが身近ではないといえると思います。 P 1 2 8

アメラジアンスクールでは英語と日本語、アメリカの文化や社会、沖縄の文化や社会の両方を学び、どちらにもつながっているという誇りを持たせる教育を試みています。そういったアメラジアンスクールやアメラジアン存在を沖縄の人が広く知っていき、こんな子たちがいるんだ、こういう文化のあり方があるんだということを、みんなで共有していくことで沖縄社会がもっと豊かになっていくと思います。 P 1 2 8～9

浅野メモ——この問題は、私が長い間主張してきた異質協同にかかわる問題である。多文化「並存」「共存」の社会における、異質協同型文化維持創造には、まず各々がもつ文化を協同過程で発揮することがある。(1)の「外国の文化を身につけている人たちの個性や文化をできるかぎりそのまま活かしていくような社会」という叙述は、このこととかわる。それに加えて、それらの異質なもののハーモニーが新たな文化を創造すること、そしてさらに、ハーモニーというレベルを越えて、おのおのがもつ異質な文化を基盤にしつつの協同作業が、それまでもっていた文化を越えた新たな文化を創造すること、この三つがある。

また、異質の文化が、他の文化のなかに移住してくることのなかで、移住先の文化に受け入れられない状況が強く存在するために、もともとの異質な文化を基軸に、移住先との関係のなかで、その異質な文化を維持するだけでなく、特別に発展させるケースもある。それは、(6)で紹介する、「日系人」が日本本土社会との関係でつくりだす文化に典型的であろう。

(3) アメラジアン

アメラジアンとは、アメリカ人とアジア人の両親のあいだに生まれた、米軍の派兵・駐留を出生の背景に持っている人びとを指すことばです。アメラジアンの父親には米軍人・軍属だけではなく、米兵の派兵・駐留に伴って移住した民間人も含まれているとされています。一方で、アメラジアンを米軍の派兵・駐留を出生の背景に持つ人びとだけではなく、アメリカ人とアジア人の両親のあいだに生まれたすべての子を含むとする人もいます。 P 1 3 8～9

アメラジアンとは、1970年代のベトナム戦争中に生まれたことばです。ベトナム人女性と米兵のあいだに生まれた子どもたちが、出生の背景を理由に激しい差別にあっていることをアメリカで報道する中で用いられるようになりました。アメリカにおいて、アメラジアンということばはたいいベトナム系の子どもたちを指すものとして用いられてきました。 P 1 3 9

1981年の日弁連調査の報告書には、「国際児」の数は推定で約三千五百人と記載されています。また、現在も毎年、約二百五十人のアメラジアンが沖縄に誕生し続けています。P140

沖縄には、アメラジアンに対する差別・偏見の問題がありますが、彼らが多文化共生の社会を作っていくための担い手であることもまた事実です。P144

浅野メモー—「多文化共生の社会を作っていくための担い手」という表現は、先の「ミドルマン」「異質協同のコーディネイター」にかかわるという意味も含めて、ことさらに注目していきたい。それだけにその実例についての研究が期待される。

(4) 日系人

彼らには、「純粋な日本人」としての自負があるために、日本人の亜種としての「日系人」という呼び方に差別的なニュアンスを感じる。また、日本的な教育をうけて社会化された現地生まれの二世も同様な感情を持っている。他方、現地で社会化した二世と三世は、自らをnipo-brasileirosあるいはdescendentes de japonesesだと認識し、外部規定の「日系人」という呼び方に反発する。いずれの呼び方も「ブラジル人で、日本人の血をひく者」という意味である。彼らはブラジル人であるというところに強い誇りを感じており、ブラジルは移住者によって形成された国家であるため、たまたま自らの祖先の中に日本生まれの人がいるという程度のニュアンスとして解釈している。P175

(5) 沖縄社会

崎浜佳代 外国人・日系人の住民が、主に職場や友人関係といった個人的な関係性の中で生活を営んでいるということである。沖縄社会といえば地域や親族の連帯が強調されることが多いが、外国人・日系人の住民の生活の中心はそこにはないようである。P83

国吉サオリ ホスト社会と多く接触する「場」では自らのエスニック文化を抑圧し、家族や仲間たちとの私生活の「場」においてはエスニック文化を表出するという二重の生活様式を繰り返しています。(中略)文化的な抑圧が問題でありながらも問題として顕在化しないということです。(中略)日系人が沖縄社会に受け入れられるようにするためには、沖縄の人びとの生活様式などを模倣することが唯一の条件とされていました。P159

田島久歳 沖縄社会において外来者がメンバーシップを獲得するためには、親類・縁者ネットワークに包摂される必要があります。P163~4

田島久歳 血縁・地縁関係者を受け入れる沖縄社会の伝統により、ウチナーンチュ系人は恒久的かつ生来的なメンバーシップを獲得しているのであり、親類・縁者ネットワークを通じてホスト社会・沖縄に包摂されます。他方、来沖前のブラジル社会で獲得した文化・価値観を有するウチナーンチュ系人は、沖縄においてもネットワークを介して疑似家族的な役割を果たす種々のアソシエーションを組織します。そして彼らは、時間の経過と

もに新たな異文化集団として沖縄社会に統合されていきます。

このように、沖縄社会は地縁・血縁者の多様な価値観を受け入れ・包摂するメカニズムを持ちますが、それ以外の他者を地域社会から排除する側面があることも事実でしょう。

P 170

浅野メモ——これらの指摘は、本土から沖縄に移住してきた私の体験としても、共有するところが多い。そのあたりは、浅野誠『沖縄田舎暮らし』（アクアコーラル企画2007年）でかなり書いたことでもある。私のようにウチナムクである場合には、血縁的つながりをかなりもつ。そしてまた、今地縁的関係の強力な集落に居住しており、いやおうなしに地縁的關係を築きつつある。

(6) 本土社会

田島久歳 現段階では、同化を強要する日本社会に対する絶妙な対抗をしているということができるといえるでしょう。日本社会が彼らを「日系人」としてカテゴライズしているため、ブラジルでは存在しなかったニッケイ（ジン）あるいはニッケイ（ジン）・デカセギという新たなアイデンティティを創造しようとする過程にあるのではないのでしょうか。他者としての日本人に対峙して心理的な安定、精神的な健全性を保持するための戦略ということがいえるでしょう。その戦略に基づき、日系人は目的に応じてさまざまなアソシエーションを組織し、多様なネットワークに基づく新たな日系人社会を日本とブラジルのあいだに形成しつつあります。

それにしても、日系人はなぜそれほどにまで日本社会に対抗するのでしょうか。それは、学校、地域社会、就労の場といった日本社会との具体的な接触の場において日系人は十分理解・評価されていると感ずることができないからでしょう。 P 170

田島久歳 日本社会 日系人についても親類・縁者であるという根拠だけで受け入れる伝統や制度がないため、メンバーシップが得られません。そのような社会におけるウチナンチュ系人は、生き残るための戦略としてエスニック集団としての結束を固める方向に進みます。具体的にはブラジルで築いた関係性を日本で再構築したり、ウチナンチュ系人というホスト社会への対抗アイデンティティを形成したり、ネットワークを介して新たなウチナンチュ系社会を形成します。同時に、疎遠になりがちだった沖縄県の親類・縁者とも関係を強化していきます。このような多様なチャンネルを活用しながら時間の経過とともに日本社会に入り込む者が現れる、といった経過をたどることがわかります。（中略） 日系人は日本社会で生き残るために対抗アイデンティティを形成し、目的に応じてさまざまなアソシエーションを組織します。その結果、日系人は日本の中にいながら、日本社会との接点は限られ、エンクレーブのようなコミュニティを形成します。 P 171～2

浅野メモ——このアソシエーションは、私自身が長い間主張してきたことである。この場合には、共同体的色彩が強いアソシエーションという特質がある。そのケースもそうだが、しばしばコミュニティという用語が使用されたりする。だから、このケースの場合にアソシエーションという用語を使用して、論じている点に興味をそそられる。

なお、本土社会では、共同体的色彩を濃厚にもつ社会と、大都市型のように、商品つながりの色彩を濃厚にも

つ社会とでは、事態が大きく変わろう。たとえば、愛知・三重に住む「日系人」と、東京に住む「日系人」では、状況が大きく変わろう。

子どもの教育 セミリンガル

駒井洋 最近、言語学の領域でセミリンガル化という現象が注目されています。これは日本語でも母語でもよいのですが、9歳頃までに一つのことばをしっかりと獲得しないと、どちらのことばも不自由になり、そのまま成長すると、結局は学校にいてもついていけなくなります。子どもに、どのことばを、どのように教えるか。これは、子どもたちをドロップアウトさせない決定的な要因であると私は考えています。 P123

浅野メモー—セミリンガル問題は、どこかで何度か出会った記憶はあるが、深めきれないできた。興味をそそられる重要な問題であり、今後深めていきたい。

英日西仏語雑誌OKINAWA 小川京子さんのクバ物語掲載 (2008年7月6日)

昨日訪問した小川さん宅でみつけて購入。

沖縄を訪問する人、関心をもつ人で、英語スペイン語フランス語使用者に大変便利な、沖縄紹介書。日本語も書かれている。

編集長はミゲール・ダルーズさん。どこかで聞いた名前だなと考えていたら、昨秋三木健さんのオキネシアハウスで、ニューカレドニアからの訪問者とのパーティで、通訳していた人だと思い出した。だから、沖縄では珍しいフランス語も使用しているのだ、とわかった。

それでも、中心は英語なので、英語使用者には絶好な案内書だ。案内書というよりも、沖縄を深めて考えるきっかけになる本だろう。

この号の第一特集として、小川さんのクバ話が掲載されている。他に琉球舞踊、空手、音楽、モズクなどのことが掲載されている。

写真満載のカラフルな本で、沖縄紹介になかなかいい本だといえよう。



沖縄と移民 (2008年7月6日)

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」(藤原書店2003年)のなかの、比嘉道子「歴史から見た出稼ぎ・移民」である。

私が移民についての関心を深め始めて、日が浅い。まだまだ学習中で、研究段階には至っていないといっ

い。

それは、私が住む玉城を含む、近年の市町村史がかなり深い記録を公表し、私もそのいくつかを目にしたことなどがあってからである。先日も、近隣の南米帰りの方に、「村史にはあなたのこともでているね」と話したところ、「知らなかった」ということもあった。近隣では、移民に直接間接にかかわった人がかなり多い。沖縄の多くの地域でそうだろう。

教育史にかかわっては、移民に送り出す際に、他府県出身者との標準語による会話に困難があるということなどで、移民教育の必要が戦前の県議会で論議されたこともあったが、本格的な検討研究はまだだといえよう。

沖縄を考える際、1000年以上以前から、海外交流が重大な位置を占めてきた。今日の「国際交流」「グローバルな交流」を語る際、つい最近まで行われてきた移民、そして、出稼ぎ問題を視野からはずすことはできない。特に、「下」「弱者」の国際交流を考えるとき、重要な問題である。

前置きはこれくらいにして、この論文でのいくつかの注目点を抜き書きの形で紹介しておこう。

1899年の土地整理事業「琉球中の土地が計測され県民に配分され、人々は初めて私有財産として土地所有が許された。と同時に、金納による土地所有者個人による納税となった。ここに、身体移動禁止の前提だった土地に縛られた生活は解かれ、人々は移動の自由を手に入れた。出稼ぎや移民という琉球人の島外への移動は、このような社会背景があつて可能となった。」

「沖縄からの移民は、自由民権運動の行き詰まりの先に、新天地を求めるという「雄飛」の志で始められた、と言える。」

ハワイでの監視付き労働 ハワイがアメリカの準州となり、王国法律廃止に伴うもの。「沖縄移民は、自由移民となって望む耕地や土地へと移動した。この契約労働から自由労働への変化が、沖縄移民成功の第一の要因である。」

「占領軍のために居住地を明け渡して、自らは「余剰人口」に数えられて、外国へ移住する道を選択させられたことは、「棄民政策」と指摘されよう。」

村上呂里さんの沖縄の言語教育にかかわる鋭く示唆的な論文を読む

(2006年6月14日)

村上さんから、つい最近発刊された、以下のものを贈呈いただいた。

A 科学研究費報告書「多言語社会における言語教育に関する研究 ——ベトナム・タイグエン省をフィールドとして——」(梶村光郎・那須泉との共著)

B 宮良當壯と柳田国男の間 『琉球大学教育学部紀要』68集

他の本を読み検討している最中であつたが、大変興味深く示唆に富むものであつたので、ひきこまれて分厚いものを読み切ってしまった。というのは、私自身が1970～80年代に考え主張していたこと、そしてそれ以降も考えてはいたが、余り見えてこなかったことに深くかかわって論及されていたからである。読み進むうちに、

私自身の当時の主張も検討対象に入っていて驚いた。私も「歴史上の人物」になりかかってきたみたいだ。

ということで、示唆を受けたことを列挙する形で紹介しておきたい。できれば、多くの方に読んでほしいものだが、両論文とも市販されてははず、一般には手に入れにくいものである。直接村上さんに要請するしかない。また、これらについての研究会検討会でもあれば、と願うものである。

1) Aは、ベトナムをフィールドにしたものであるが、そのベトナムにおける状況は、沖縄の状況を考えるうえできわめて示唆的である。そしてまた、Aのなかの村上論文「多民族国家ベトナム言語教育の光と影」のなかの「補論 比較考察のために 沖縄地域を視座とした近代日本言語教育史の検証から」は、「補論」の域を超えた71ページにわたる大論文である。ベトナムとの比較を含みつつ、沖縄の言語教育についての重大な問題提起を含んでいる。Bは、この問題提起の一環に位置づけることができよう。そこで、この補論を中心に、私が示唆を受けた点を列挙しよう。

2) 「①「国民」の形成という観点からの「国語」指向、②言語＝道具観に立つ言語科学主義を背景とした「標準語」指向、③言語＝文化観に立つ地域に根ざした文化創造実践、④言語＝生活認識の武器観との4者の拮抗関係」が、一つの重要な分析枠組みとされている。言語教育を追求している村上さんならではの枠組みである。1970～80年代初めの私は、ほぼ④に分類されている。そう位置づけられて、私自身の当時の位置を改めて気づかされる感がする。②に位置づけられる上村幸雄さんに、70年代末だったかインタビューしたことがある（「おきなわの教育実践」の何号かに掲載されている）。その時、私が感じた上村さんと私との違いが、本論文で鮮明にさせていただいたと思う。

この枠組みの分析において、「③言語＝文化観は、本質主義に陥る危険性をたえず孕んでいる」との指摘と、沖縄地域では「植民地主義への抵抗の文化的実践として提起され、また④言語＝生活認識の武器観と一体となっていた」という分析は、興味がそそられる。また、その④にかかわって「浅野誠が鋭く洞察したように、近代教育への内的条件・要求が未成熟なまま外発的に近代教育がもたらされ、その結果内発的教育実践が生まれにくかった沖縄地域の矛盾が顕れているといえよう。儀間（進）の沖縄口で書く試みがもし教育実践創造の課題として追究されていたならば、生活語（内に根のある語）で沖縄の現実を意識化し顕在化させることの意義がもっと広がりを見せ共有されていったかもしれない。しかしながら、儀間の試みは内発的な教育実践創造の課題として発展させられることはなかった」という論述は、私の当時の論調を鋭く把握していただいたものである。私自身の1970年代から80年代初頭にかけては、沖縄教育界が内発的発展の道を歩むよう強調していた時期であった。だから、当時に沖縄の教育界にかかわって「教育実践の自己展開サイクル」という用語を造語し、強調したのである。そして、そのモチーフは今日まで継続しているのだが、私のこの論は、広く受け入れられたわけでもなく、成功したわけでもない。私のこの提起にはさらなる掘り下げをしなければ、有効性をもちえない状況にある。その意味では、儀間の追求と同様に、「内発的な教育実践創造の課題」として沖縄教育界と共有しえないままきたといえるかもしれない。そして、80年代後半における「沖縄県の教育史」の執筆にも、このモチーフは強く意識していた。しかしながら、「沖縄県の教育史」のそうしたモチーフに注目されることはなかった。野本三吉さんが、最近このモチーフにかかわることに気づいてくださったのが唯一である。このモチーフどころか、「沖縄県の教育史」の書籍そのものが、一部の研究者は別にして、一番検討していただきたいと思った沖縄の教育界の

方々からは「無視」「無関心」状況に置かれてきた。そして、今再び沖縄に在住して、この問題を考えざるをえない位置に置かれはじめている。

こうした問題を、ベトナムの少数民族の現場に即して論じているのが、Aのなかの村上論文である。これだけの調査研究期間で、しかも外国からの訪問者としての研究として、よくここまで掘り下げられたと感心する次第である。

3) 最近、沖縄県が「ウチナーグチの日」を制定したことが象徴的であるが、ウチナーグチをはじめとして沖縄文化にかかわるものが、「ブーム」に近い状況になっている。まだ標準語励行運動が行われていた70年代には想定できないことである。とはいえ70年代に沖縄的なものを教材にいれこむ動きが徐々に広がりはじめたが、しかしそれが教材への「味付け」としておこなわれていることにとどまっているのではないかと私は発言してきた。今日の「沖縄ブーム」下であって、沖縄文化を教育のなかにもちこむことはどのようなものなのだろうか。私には「味付け」的性格が色濃くあると感じる。主として「文化遺産」的関心であり、いかなる文化を継承・創造するのか、という問いが稀薄であるように思う。そこが村上さんがいう③の主張が本質主義に陥らないための重要なポイントのように思う。そして、ベトナムにかかわって村上さんが指摘しているように、異文化コミュニケーションの問題が、もっぱら少数民族を対象にして論じられており、優勢言語を使用する側も対象にして考えるということが未着手の課題に近い状況に置かれているのである。そのことは、沖縄へのヤマトンチューのまなざしにも共通している。「観光」「鑑賞」的まなざしなのである。そうしたなかで、沖縄移住者のなかに、そうしたまなざしとは異なる新たな模索がはじまっていることにも注目しなければならないが。

このあたりのことは、補論のなかで高良勉さんの主張などを使いながら論じられている。つまり「今後学校における言語教育が、これらの「貴重」という言葉では表現しきれない重みと厳しさを持つ仕事にどう参加していくのか、「島クトゥバ」で沖縄戦を「語り-聴く」という行為とどう向き合っていくのか、そのことと一体となって、複合文化の豊かさを具体的な「学力」としてどのように提示し、多言語社会を豊かに切り開く「学力」を構想していくのか、その解明が切に求められている。本研究の今後の課題としたい」と述べられている。

以上の論にからんでは、Bの「宮良當壯と柳田国男の間」にも興味深い論の展開がみられる。

4) Aの補論のなかで、「小学校「国語科」成立前後沖縄地域における言語教育論」の節は、私が「沖縄県の教育史」、そしてそれ以前に復刻「沖縄県用尋常小学読本」の解説で述べたことの不足をおおいに補っていた。なお、後者の解説は、大量の印刷ミスがあり、急遽、訂正版を挿入したが、たいていの本にはまにあっていないので、読者には意味不明の個所が多すぎる状態になっている。そのまま発行所は倒産してしまったためである。

このあたりの時期は、沖縄教員の「基本型」形成期でもあり、そこで形成された「基本型」は今日もなお沖縄教育界は基本的に継承している。そのことの一つの典型として、1983年「東江グループ」の論調を村上さんは検討されていると私にはみえる。

とはいえ、1980年代ころから大きな変化をうけつつあるが、主体的にそれをくみかえ、新たな沖縄教員をつくりあげていく営みはいまだ弱い。

5) ベトナムでのドイモイ政策のもと市場経済化の進行が言語問題におよぼす問題にA論文は触れている。そして「グローバリゼーションと一体となった優勢言語のさらなる優勢化へ向けた力は強大である。市場経済化に適応する学力を求めるかぎり、単一言語教育を志向するしかない。一方で、自然を破壊し、文化の均質化を招く市場経済化・グローバリゼーションに対して「持続可能な開発」を求める立場から、地球生態系の重要な要素として少数言語をとらえる議論が起こっている。少数民族言語は、地球生態系の一員として生き、地球生態系を維持保全していく知恵に満ちている。実用的な価値（世界の多くの言語がもつ先住民の知識など）に加え、世界の生態系と言語が健康に存在することが、種としての人間の生存の持続にとって必要とされている」と論じている。

非常に興味深い。最近いろいろなところで私が強調していることだが、沖縄においても産業社会化が近年極度に進行し、新自由主義的政策も深く進行しているにもかかわらず、教育界はそのことにきわめて無頓着である状況がある。国家との関係の問題だけでなく、市場経済・新自由主義的動向と、言語を含む文化がどうかかわるのか、人々の生き方とどうかかわるのか、といった視角からの検討が不可欠である。その点で、村上さんが今後どのような提案をしていくのか注目していきたい。その際、国家と市場経済の視点はあつたのだが、そうではない視点をどのように提起していくのが焦点になる。「今後、ベトナム少数民族地域と沖縄地域が、こうした精神世界と一体となった地域語・民族語文化の継承発展をめざす授業づくりの交流を図り、市場経済化とは異なるもう一つの「開発」のあり方を提示し、学力観を構築していくことが、地球規模の課題であるといえよう。」と述べられていることである。その一つのヒントとして、「持続可能な開発」とか「地球生態系の維持保全」に注目し、そのなかで「少数言語」に関心を寄せておられる。大いに共感できる志向性である。と同時に、それをもっと深めてとらえる必要があつたろう。たとえば「開発」をいうかどうか、人々の生き方の問題としてどうとらえるのか、言語創造の問題をどうとらえるのか、共同・協同とかネットワークといった問題をどうとらえるのか。「市場か国家か」という議論にもつていかれないために、こうしたことを追求していかなくてはならない。

6) 文字文化（書き言葉）と音声（話し言葉）の関係への着目にも重要な提起がいくつもある。たとえば「近代言語教育の第一義は、文字文化を全ての「国民」が所有し、公的世界に参加することを原則とした点にある。ここに前近代には、乖離していた話し言葉（生活語）文化圏と文字文化圏の一致のあり方が課題となつてくる。そのあり方に国民国家のあり方が反映される」「日本において近代言語教育の出立期、19世紀末から20世紀初頭（明治10～20年代）にかけて「国語」概念の議論においては、文字としての側面ではなく、話し言葉の側面が強調された。そしてそれまでの話し言葉（生活語）文化圏を抑圧し、「国語」文化圏に入れ換えることを志向し、「国語」は植民地の住民を含む民衆の日常生活世界まで教化する言語としての意味を強く担っていた。その核となつていったのが「標準語」概念である。」「学校言語＝標準語と生活言語との乖離になつた東北地域の小学校教師たちは、1930年代民衆の生活現実を生活語（母語）で綴るといふ教育方法を見出し、生活綴方運動を興した」「（ベトナムでの）国語（クオックグー）という文字表記法は、それまで漢字漢文やフランス語が支配していた公的世界＝文字文化圏に、「翻訳者」を介することなく、直接的に民衆が参加することを保障し、被抑圧民族（ベトナム民族）の身体化された言語＝（声）（「民族語」）をそのまま文字文化圏に顕現しうることを保障するものとしてあつた。」

書き言葉支配から脱却していく時に、話し言葉の復権ということが一つの焦点となるが、書き言葉による話し言葉の統制だけでなく、その逆のすじみちをどうみるかを検討してみるなども興味深い課題であつたろう。

7) 言語学・言語教育に疎い私にとって、ポストモダンのさまざまな動き、あるいはそれとからんだり対抗しながら展開してくる、さまざまな追求の動き、ヴィトケンシュタイン、デリダ、社会構成主義などの動向に対して、村上さんがどのようにとらえ、どのように論を展開されるのか、にも興味がある。それらの点も含めて、いろいろと教えていただきたいことがたくさんある。

今後の村上さんの提案の発展をおおいに期待している。

沖縄とバイリンガル 村上さんの本から学ぶ (2008年4月15日)

沖縄タイムスからの依頼で、村上呂里『日本・ベトナム比較言語教育史——沖縄から多言語社会をのぞむ』(明石書店2008年)の書評を書く作業をしている。

最新刊のこの本は450ページもの分厚い本で、村上さんの博士論文でもある。

村上さんとは、彼女が琉球大学に赴任された翌年に私が転任したので、わずか一年だけ勤務先が同じだった。短い間だが、印象的であった。それをきっかけにして、その後も、多少は交流があった。そして、最近、この本のベースになった論文などを読む機会があって以降、沖縄教育を中心とした研究上の交流が生まれつつある。

私自身は、1972年に沖縄に赴任して以降、沖縄教育について多くの問題提起的な発言や論文を書いてきた。といっても、模索的、試行的問題提起といった色彩が強く、深めきれていない問題が山積になってきた。そうした問題の一つとして、沖縄教育における言語の問題がある。端的にいうと、ウチナーグチと「標準語」の問題を、教育としてどうとらえるか、どう設定していくか、という問題である。それは言語教育の問題だけではなく、学力問題に象徴されるように、教育全般にかかわるテーマである。

今、私はアメラジアンスクールインオキナワで仕事をしているが、その教育の特徴はバイリンガルにある。日本語での教育を基本として、外国語として英語などを教える学校、逆に、英語での教育を基本として、日本語も教える学校は、たくさんある。しかし、両語をともに基本的な言語として教育活動を展開し、生徒たちも二つの言語を日常的に同時並行的に使用している学校は、日本・沖縄のなかでは例外的存在である。その意味では、大胆で先駆的な教育活動を展開している。

ひるがえって、沖縄社会は、19世紀末から21世紀初めの今にいたるまで、「標準語」とウチナーグチのバイリンガル社会である。最近では、「標準語」が圧倒して、ウチナーグチを使用できないだけでなく、理解できず、「標準語」のモノリンガルの人も増えているが。

特徴的なこととして、学校は「標準語」のモノリンガル教育をしており、ウチナーグチは人びとの生活・文化・社会のなかで生きている、ということがある。そして、「標準語」がウチナーグチを抑圧するという関係がつけられてきた。最近では、「しまくとぅばの日」が設けられるなど、それとは異なる動きもみられはするが。

この両者の関係をめぐっては、100年を越す、激しいからみあい、葛藤対立が、論争という形ばかりでなく、人びとの生活レベルで続いてきたのである。この本には、これらの過程を丁寧かつ深く分析し、鋭い問題提起を

している。

こうした問題を「バイリンガル」問題として積極的に把握するという事は、私自身は最近のことだ。そこには村上さんが書き表してきたものの示唆が大きい。

この本については、いろいろと書きたいことが多いので、連載の形になるだろう。

この本の私にとっての主ポイント 村上さんの本から学ぶ2 (2008年4月17日)

作業の進行の都合で、この後の記事が、前回の「村上さんの本から学ぶ1」の記述と多少ダブルことをお許しねがいたい。

まず、この本全体の私なりの捉え方を紹介しておこう。

沖縄も含めて近代日本の学校においては、世界的には珍しい「国語」という表現を使って、日本語教育が行われてきた。しかも、ウチナーグチの使用を抑圧して、ウチナーグチを「標準語」に入れ換えるといったアプローチが、広くとられてきた。そうした発想にもとづく教育活動が、言語教育だけでなく、学校教育全般で広く展開され、それは、長年にわたって学校教育における沖縄文化否定、生活現実からの断絶をも生みだしてきた。

そうしたことは異なって、地域の生活現実・そして地域の文化を豊かにする方向で、言語教育を探る課題に、本書は挑んでいる。その際、〈声〉と〈文字〉、「言語=文化」観と「言語=道具」観、多声と単声、グローバル・民族・地域など多様で新鮮なキーワードを駆使しながら、深く鋭い分析をおこなうだけでなく、これらの言語教育、とくに沖縄における言語教育について重要な問題提起をしている。

したがって、私自身が沖縄教育・沖縄教育史について30年余り模索・試行的提起してきた作業と関心を共有することが多いというだけでなく、言語教育について、沖縄教育史についてのよりリアルな把握が本書で展開されているので、私の次の「沖縄教育史」作業の際に、参照すべき重要なよりどころになるだろう。

そして、これらの問題を、「日本」「沖縄」「ベトナム」「少数民族」の歴史的な比較のなかで叙述していることが、分析と問題提起に、新鮮さ・厚み・ユニークさを生み出している。

日本語創造とウチナーグチ 個人体験 村上さんの本から学ぶ3 (2008年4月17日)

ウチナーグチとヤマトグッチは「敵対」関係にあるかの様相がみられるが、丁寧にいうと、その状況をつくり出したのは、「標準語」を絶対的なものとして推進しようとする側が、ウチナーグチと「標準語」とを敵対関係に置き、ウチナーグチを抑圧排除してきたことに起源する。

日本語を豊かにするものとして、歴史的な背景をもつ各地域の文化、および人びとが今直接かかわっている生活現実に根ざした、日本各地の言語が存在している。さらに、日本には、多様な民族・言語文化をもつ人びとが在住しており、それらとの交流のなかで日本語が豊かになるという視点をもつ必要がある。

こうした視点をもつとき、日本語を「国語」とか「標準語」とかいう表現を使って述べるよりも、「共通語」「普通語」といった用語、あるいはたんに日本語という表現した方がよりよいであろう。

また、こうした視点にたつとき、ウチナーグチは日本語をより豊かにすることに貢献できるであろう。と同時に、日本語を豊かにすることが、逆にウチナーグチを豊かにすることも通じるであろう。

これらの発想の基礎には、「言語は創造するもの」という当たり前の発想がある。当たり前でありながら、実のところ、沖縄在住の人びとは、ウチナーグチの創造にも、日本語創造にも参加してこなかった。というよりも、参加を否定されたり拒否されたりしてきたのである。

個人的な体験だが、20代前半の大学院生時代に、ある論文を読んでいたときに、「日本語の創造」「日本語創造に参加」という表現に出会ったときに、きわめて新鮮な印象をもったことがある。

岐阜県の農村出身の私は、中学から名古屋に通うことになり、言葉上のカルチャーショックをうけ、それ以降、東京に生活の場をうつして後も含めて、生まれた地域の言葉を使う環境にはなかった。環境がなかっただけでなく、その言葉を使うことがためらわれ、というかある意味でおさえつけられてきた。そのため、数年もたたないうちに、その言葉の使用ができない状況にいたった。結果として、地域的特性を極度に薄めた言葉使用をするに至った。

以上のような私の個人的言語事情に加えて、20代半ば以前の私は、自分の地域言語を使用することは抑圧すべきであるという考えに囚われていた。だから、日本語創造、日本語創造に参加という表現に大変な新鮮さを覚えたのである。

沖縄に来て、宮古ムク（婿）になったこともあって、宮古の人びとを含めて沖縄の人びとが、実に生き生きとウチナーグチ、ミャークグチを使うのにショックを覚えた。同じような印象的体験として、東京時代に、関西から来た人びとが「自信たっぷりに」関西弁を使用することにショックを受けたことがある。そんななかで、私自身の言語的アイデンティティは何なのか、などと思わされてしまったのである。

そして、沖縄に住みはじめて以降、私はウチナー式ヤマトグチに少しずつ近くなっていく。

「沖縄的なもの」への肯定と否定 村上さんの本から学ぶ4 (2008年4月18日)

私は、1972年から沖縄に住んでいるのだが(途中1990~2003年は、再び愛知在住)、その沖縄で気づいたことの一つは、次の二つのことの同時存在と両者の間の揺れであった。

1) 沖縄的なもの、沖縄であることへの愛着、豊かな感性を保持するだけでなくそれを創造発展させていること。

その感性は、生活現実に根ざし、生活感あふれるものである。その創造発展は、芸術芸能表現に象徴的であるが、それは生活そのものが創造的であり、感性そのものを豊かに発展させていることの反映であることを見落とすことができない。

これらにかかわっては、沖縄音楽が全国的な影響力をもって展開していることが注目される。

2) 中央志向、ないしは「中央」が設定した「標準」への志向があり、それらが設定された競争の場で、成功を収めることへのこだわりが強いこと。

これは日常的にみられる。代表的なのは、高校野球への熱狂的支援。沖尚の優勝で頂点になる。とはいっても、1970年代と比べれば、少し弱くなっているかな、と思う。実況中継中の道路の混み具合が、70年代なら都市地域でも実に閑散としていたが、いまでは結構交通量がある。

教育にひきつけていうと、全国学力テストでの沖縄「最下位」と、それへの強いショックと同時に「奮闘への誓い」がある。

村上さんの本のなかに柳田国男の「劣性承認」という用語がしばしば使われている。たとえば、「ただ片端から中央の御注文に応ずるのだったら、田舎の小学校の国語の時間は何倍あっても東京にはかなわぬだろう。劣性承認を目的とする国語政策は、もういい加減に罷めてはどうか」（1941年）という引用がある。競争の土台に乗れば、結果として沖縄の「劣性」を「承認」することになるのである。

こうした発想については、私自身が1983年に出した「沖縄教育の反省と提案」（明治図書）のなかで、本土と比較して沖縄教育を考える発想についての批判的な検討のなかで指摘したことでもある。

以上の二つが、同時に存在し、かつ両者の間の揺れがみられるのである。あるいは、両者の捉え方を棲み分けさせていることも多い。

言語観 生活・文化と道具・科学 村上さんの本から学ぶ5（2008年4月19日）

4で述べたことを考えるうえで、村上さんの本は多くの示唆に富んでいる。ここでは二つのことを紹介しよう。

一つは、「生活」「文化」と「道具」「科学」という対比のなかでの論の展開である。

村上さんの本は、言語観にかかわって、次のような四つのタイプを提起し、それらの特質・関係について論を展開している点に、一つの特徴を見出すことができる。

- ①「国民」の形成という観点からの「正しい国語」指向、
- ②「言語＝道具」観に立ち合理化を指向する言語科学主義を背景とした「標準語」指向、
- ③「言語＝文化」観に立つ地域に根ざした文化創造実践、
- ④「言語＝生活認識の土壌」観

この四つの区分を使えば、前回私が述べてきたことを、前二者と後二者との対抗関係のなかで把握すると、理解を掘り下げることか可能になる。

もう一つは、<声><文字>の対比を使つての論述である。沖縄では、「標準語」の<声>を、アクセントまでも含めて強制する営みが行われた。そして、ベトナムで行われたように、「<声>↔<文字>の相互的行き交いのもとに<文字>の習得をめざした」のとは対極的な「標準語」強制がなされた。

人びとがもつ文化・生活をもとにした<声>の文化・生活が、学校における言語教育においては排除抑圧されたのである。沖縄の場合、とくにそうである。村上さんは、そこを深く分析している。

ところで、日本における研究的業務についている人の多くには、私も含めて、<文字>の文化を通して、<声>

>の文化を統制するスタイルが根強く染みこんでいる。そこでは、<声>の文化を<文字>の文化の創造につなげていくという発想・体験が希薄である。

それとは対照的に、人びと自らの生活のなかから協同で言葉をつくり出していく活動を展開した、フレイレなどの国際的な識字運動に示唆を受けつつ、論は展開されている。とくに、ベトナムでは、科学・思想創造のためにふさわしいベトナム語創造が展開されたことを指摘している。

こうしたアプローチは、私が集中して取り組んでいるワークショップの一つの特性とも共通する。

以上の指摘は、地域言語が「科学学習」に弱点をもつ、という決まり文句に対する鋭い反論にもなっている。また、本のなかでは、ウチナーグチが豊かな語彙をもつという指摘の引用など、ウチナーグチにおける豊かな言語創造にも言及される。伊波普猷が行った『琉球語便覧』の仕事への注目もそうである。

※ ついでに気づいたことである。私自身も含めて、日本の学校における外国語学習は、もっぱら原文を和訳する<文字>学習を主軸にしてきた。そのため、私の例でいうと、英文を読む際に、ひっくりかえして訳すという技法がしみこんでしまい、頭から順に読んでいくというやり方に変わるまでにずいぶんの時間がかかった。会話の際にも、いちいち文字イメージを出しながらしてしまうというのもそうであろう。<声>の文化が欠落した英語学習を私はさせられてきたのである。

沖縄的なものを教える 文化と生活現実 村上さんの本から学ぶ6

(2008年4月20日)

村上さんは、前回で紹介した四つの言語観のなかの③と④にかかわって、文化を考えるときに、その文化を絶対的なものにとらえ、文化を創造発展させるものとはとらえない文化本質主義に陥ることに警告を発する。そのためには、「生活現実」と結び合うことが大切だと指摘する。

私なりにとらえると、こうなる。たとえば、「古典」といわれるものが、たんに保存継承ということだけにとどまって、そのジャンルの文化の創造を欠くとき、それは「文化財保護」になってしまう。「古典」は、常に、「今、ここでの」時点における創造と結びあうことが大切だと考える。「古典」を受け継ぐといっても、それは現代における再創造、つまり人びとの生活現実のなかで、文化的に価値あるものを、現代において再創造していくのである。言語創造においても当然そうである。

その点でいうと、音楽をはじめとする沖縄芸術・芸能には、古典を継承しつつも、「今、ここで」創造発展させられているものが圧倒的な量と質をもって存在している。地域に伝わる伝統音楽が「保存」ととどまらず、今日なお創造されている地域は世界的に少なく、インドのどこかと、バリと沖縄だという話を、30年ほど前に聞いたことがある。

そうした意味では、沖縄は生活現実と結びついて文化創造していく生きた豊かな土壌が強力に存在している。言語の世界がそうではない、とはいえないだろう。しかし、言語を軸とする学校教育の中心的部分では、文化創造という発想が抑圧されてきた。

それではまずい、という批判的発想、反省がでてくるなかで、沖縄的なものに注目する教育実践を追求する動

きが、1960年代半ばころより広がる。しかし、その動きはそれほど広がったわけではなかった。30年ほど前に、沖縄の学校教育において、沖縄文化にかかわるものを教えるとき、それが主教材の「味付け」的なものとどめられているのではないかと私は指摘した。そしていまなお、「味付け」的な状況からそれほど前進しているわけではない。そして、生活現実と結び合った文化創造ということであると、限られた動きにとどまっているといわざるをえない。

こうした状況下にあつて、村上さんの本は、重要な問題提起といえるだろうし、それを沖縄の教育界が今後どのように受けとめていくかが注目されよう。

バイリンガル再論 村上さんの本から学ぶ7 (2008年4月20日)

バイリンガルについては、この連載の1で少し触れたが、再論しよう。

文化本質主義に陥ると、純粹にその文化固有のものを保存するということになる。そのため、複数の文化を共生・協同・混合することは否定される。この文化本質主義で沖縄文化をとらえ、「沖縄のもともとのものを大切にしよう」という考えに陥らないようにしたい。

考えてみれば、沖縄は、「チャンプルー文化」といわれるように、千年以上前から、多様な文化をもつ人びとが移住し、また多様な文化をもつ人びとが出会い・協同するなかで文化をつくり出してきた。そして、現在もそうである。とすれば、これまでに多様な交流のなかで創造し蓄積してきた沖縄文化の豊かさを、これからの多様な交流・協同のなかで、さらに豊かにする営みが重要になる。

言語のことでいうと、多様な言語文化をもつ人びとの交流のなかで、より豊かな言語文化を創造していくことが大切になる。その際、その言語が複数であることを確認しておきたい。「標準日本語」だけに限定し、他を抑圧排除するような、長年にわたって行われてきた学校教育のありようをくみかえていくことが大切である。

その点で、バイリンガルが一つのキーワードになろう。ところで、バイリンガルというと、母語は一つで、そのうえでもう一つの言語を学ぶというイメージが強い。「外国語学習」という表現にはそれが反映している。

その点では、村上さんの本で引用され、村上さんもその趣旨でバイリンガルを使用している、次の山本雅代さんのバイリンガル教育定義をもっとふくらませてほしいと思う。

「母語の維持と発展、第二言語の獲得、母語と第二言語を用いた教科教育という三つの目的を同時に実現していく手段」

なぜかという、二つの母語のなかで生まれ育つ子どもに注目したいからである。沖縄では、米軍基地の存在がきっかけとなったアメラジアンがそうであるが、近年増加している国際結婚は、二つの母語をもつ子どもを激増させていこう。

ちなみに、20世紀の大半の時期、沖縄住民の多数は、「標準語」とウチナーグチのバイリンガル状況にあつたが、そこでは、ウチナーグチを抑圧排除して、バイリンガル状態を解消しようとしてきたために、バイリンガルを育てるという視点からの教育実践上の蓄積がほとんど残されて来なかったことは残念である。

バイリンガルにかかわってもう一つ、村上さんの本にしばしばでてくる、バイリンガルのなかで、「メタ言語

意識」が育っていくという視点にも注目しておきたい。

地域・国・グローバルという視野で 村上さんの本から学ぶ8 (2008年4月21日)

この本は、日本とベトナムとの比較をタイトルにしているが、それが、たんに国・国家レベルだけでなく、地域(少数民族)・グローバルという視野のなかで提起されていることに注目したい。

近代国家形成における「国語」問題、「言語」問題に直面した日本とベトナムとを比較しつつも、国・国家の内部にある少数民族と沖縄とをも視野に入れて、論が展開される。だから、ベトナムと日本、ベトナムのなかの少数民族と沖縄との対比させる構図が使われる。加えて、ベトナムと沖縄とを直接対比する構図も使用される。

その背後には、抑圧されてきた国・地域としてのベトナムと沖縄とがあるからであろう。そして、近代国家形成といいながら、沖縄への抑圧とつながりつつ、他民族支配へとつきすすむなかで「国語」の形成確立へとすすんだ日本と、他民族支配から抜けでていく流れのなかで、ベトナム語の形成確立へとすすんできたベトナムとが対照的に描かれる。その意味で、沖縄とベトナムとを類比させながら、論じられるのである。

また、この本は、国・国家と地域・少数民族という構図だけにとどまらず、グローバルな視点を含んでいる。無論、それは、経済的グローバリズム・市場主義とは異なる。というよりは、それらに対抗するものとしてのグローバルなものの追求のなかで論がすすめられている。とくに、「サステナビリティ」がいわれる今日にあって、「オールタナティブな」(もう一つの)「言語教育」という提案が展開されていることに注目したい。私個人は、サステナビリティということにとどまらず、人間の経済活動の「縮小」＝地球上のバランスの回復という視点からのアプローチが必要だと思っているが。

こうした視点で沖縄を歴史的に見ると、たんに日本につながるだけでなく、地球上の多様な地域と実に多様で豊かなつながりをもってきたことが注目される。それは長い期間にわたる東アジアとの交流・交易の歴史、そしてまた移民の歴史、そして今日の世界的なつながりのなかで、展開されてきたことである。

こうしたなかで、中央教育施策がすすめるナショナリズム的なものとは異なる、というかオールタナティブな「ナショナル」にかかわるものを沖縄が作りだしてきたことに注目したい。調査結果として、沖縄在住住民の意識として、「日本人であると同時に沖縄人である」というアイデンティティがあると指摘されることがあるが、それに加えて、今日のグローバルな交流を反映したグローバルな視野に立ったアイデンティティ創造の流れもみることができよう。

そうしたなかで、言語教育の新たな創造が問われている。村上さんは、「もう一つの言語教育」「ことば科」を提起しながら、こうした課題に挑んでいる。

実践をどう展開していくか 村上さんの本から学ぶ9 (2008年4月22日)

以上連載してきたように、すぐれた問題提起を非常にたくさん含む本である。

さて、それらの問題提起を実践としてどのように展開していくのか。

この本は、タイトルにあるように研究的問題提起なので、実践の具体的な提案を中心とするものではない。とはいっても、可能な限り実践に即した分析、問題提起がなされている。そしてそれらの問題提起は、私と共有するもの、私が考え追求してきたものをさらに奥深く鋭く追求しているものがほとんどである。

そうした問題提起を共有する私は、1972～90年沖縄で研究活動をすすめていた当時、問題提起をまっすぐに受けとめる蓄積・態勢という点で、距離のあった沖縄の教育界のなかに、これらの問題提起を本格的に追求する「芽」のようなものを発見、促進しながら、大きく花開く準備をすすめてきた、とっていいかもしれない。その意味では、本土と比較して、沖縄の「遅れ」を嘆く、という「劣性承認」体質が根強かった沖縄教育界で、自らの実践に自信をもってもらい、沖縄の置かれた「生活現実」と結び合って、沖縄の「文化」を形成発展させていく営みを促進しようとしてきた。そのなかで、私は「教育実践の自己展開サイクル」という用語をもって、沖縄教師たちの内発的発展を促そうとしてきた。

こうした私の営みがどれだけ成功したのか失敗したのか、それは歴史的評価の対象であって、今の私には評価を下す状況にはない。それにしても少しは前進したと思いたい。

その意味では、村上さんには、明治期の小学校教師、あるいは宮良當壮について詳しく分析したような分析を、近年の沖縄教師の実践に即して検討されることを期待したい。

また、村上さんの提案する「ことば科」の実践の基盤になるような実践例を提起、あるいはその実践の「芽」について発見提案されることを期待したい。実際の学校教育のなかで、教師・父母・子どもが、これまでの制度化され、あるいは体質化されたもののなかから、「思わず漏れ出している」すぐれた「芽」を、いかに意識化していくのか、が重要なきっかけとなる。そうしたものと、「ことば科」のような、体系的なものの追求と結び合うことが重要になると考える。

その点では、「上」からの学校づくりの色彩が濃厚な日本の学校にあって、教師・父母・子ども自身が「下」からの学校づくりを展開する、その流れと結び合った研究検討が求められよう。

その点にかかわっては、この本で紹介されている、ベトナムにおける「民族語の文化的価値を継承・発展させる課題との両方に応える方式として、民族語を1科目として学ぶ『第3の方式』」についての検討と併せて、そうしたことが沖縄の言語教育にどのような示唆を与えるのか、についての研究発展を期待したい。それがバイリンガル教育の具体的展開についての示唆となりうるのか、もっと異なるアプローチが必要なのか、そういった検討を私自身がしたいからでもある。

以上述べてきたような営みを追求することが、村上さんがいう「もう一つの言語教育」「オールタナティブな言語教育」の創造へとつながっていくだろう。今後の研究展開に期待したい。

13. 政治

沖縄国際大学米軍ヘリ墜落（2004年8月17日）

沖縄国際大学本館に、隣接する米軍海兵隊普天間基地のヘリが激突墜落した。沖縄国際大学集中講義のため出向いた最初の日の16日朝、現場を見た。まず沖縄国際大学に入るのに、通行規制で苦労した。現場はロープがはられ、立ち入り禁止で、沖縄県警が取り囲み、その内側で米軍が撤去作業をしている。県警の現場検証さえ拒否されている。沖縄国際大学の当事者さえ、しばらく現地立ち入りができない状態であった。そして、大学の許可なしに、米軍は立ち木を切り倒して作業をすすめている。墜落に立ち会った人びとは、そのときの恐怖を語っている。町中の基地の危険性恐怖性を示すとともに、米軍の「占領感覚」、そしてそれを守る日本政府の姿勢が如実にあらわれていれる。と同時に、このことを日本のマスコミはきわめて小さくしか報道していない。沖縄では号外が発行され、連日の集中的報道であるのと対照的である。

ステルス戦闘機F22Aが上空を轟音で飛ぶ（2007年4月17日）

我が家上空は、沖縄本島南方海上に設定されている米軍の訓練区域への米軍機の通路である。

これまでは、F15イーグルが中心で、今日も数機が嘉手納空軍基地方向に向けてとんでいった。その後、最新鋭機がとんできた。すごい轟音なので、じっと見つめた。いままでにない機体だし、轟音だけでなくスピードもすさまじい。嘉手納から30km近く離れているここで、こんな轟音だから、基地周辺では想像しがたい。

ウェブサイトで正式名称を調べると、米空軍ステルス戦闘機F22Aラプターといい、これからの米軍の主力戦闘機だとのことだ。

機体からみても、妖怪的な恐怖感を与える。

飛行機事故（2007年8月25日）



20日の飛行機事故の翌朝、私は那覇空港から飛び立った。

搭乗前に、空港建物から事故機を撮影した。

搭乗後見たもののほうがもっとすごかったが、離着陸時はデジカメは使用できない。

一枚目はやや前部

二枚目は後部である。



『教科書検定』県民集会（2007年9月29日）

この集会には、玉城の市庁舎から、市が用意した貸し切りバスで参加した。定刻前に満席になり、市はさらにマイクロバスを用意した。市全体では何台のバスを出したのだろうか。乗車したのは比較的年齢が高い層であり、若い方々は自家用車ででかけたのだろう。

1時出発であったが、会場に近づくにつれ、激しい渋滞で、結果的には会場に3時過ぎの到着であった。

会場は溢れていた。集会の進行は、「自決」シーンの体験者証言でクライマックスに達した。胸に強烈に迫ってくる。検定で「軍隊の関与」を否定した人は、この事実をどれだけ知っているのだろうか。これだけ多数の体験者目撃者がいるなかで、あえて、それを否定する人には、強烈な意図を感じる。今回の集会は、まさに党派・世

代・思想を越えて、戦争下における事実を受け止めることを出発にして考える人たちが参集している。12万人もである。参加したくても参加できなかった人をくわえれば、県民のなかのきわめて多数の人々が、この集会にかかわっているといえよう。

私自身、こんなに多数が集まる機会に出会うのは、大変久しぶりだし、沖縄では、初体験である。なにせ県民の数%が集まっているのだ。集まっている人たちは、政治に深い関心をもつ人というよりも、ごく普通の人たちが多い。

こんな県民の共通の声に、政治の世界はどのように動いていくのであろうか。

帰りも大変な渋滞である。私たちのバスが会場周辺から出た時には、集会終了後から1時間30分が経過していた。

私の記憶に残る大きな集会であった。



県民集会に参加した人々と交通手段 (2007年10月1日)

県民集会が終わって2日。当日のいろいろな話が聞こえてくる。

- 1) ある青年会では、バイクに高校生をのせて会場までピストン輸送。
- 2) ある近隣の人は、開会1時間前に出発したが、開会后1時間30分たって、到着。車のなかのラジオで、会場の様子を聞いていた。
- 3) 外国人も参加。私の知人のアメリカ人・アジア人も参加。
- 4) 一家を代表して参加した人も。私の近隣でいうと、数軒に一人は参加。当日の参加者数から計算すると、8%の参加だから、数軒に一人ということになるが、それと合致する。
- 5) 参加できなかった人は、まず人に会うと、参加できなかった理由を話す。風邪をひいていたとか。一家を代表してお父さんに参加してもらったとか。

当初参加予定数の2倍以上の参加だったから、いろいろと思わぬ事態が、とくに交通関係で続出である。これだけの人々が、みずからの判断で参加するということのすごさを実感する。会場参加数は11~12万人かもしれないが、会場に行きつけなかった人など、参加意思をもっていた人を含めると、すごい数になりそうである。

このブログの私の県民集会関係のアクセス数は、普段のものの数倍である。

歴史を「変えようとする」ことに対して、「歴史をつくりだす」動きが、とてつもなく広く深く渦巻いている。それが沖縄らしいのかもしれない。

県の旅券センター 久しぶりの国際通り (2008年11月14日)

パスポートが期限切れなので、更新に県庁まででかけた。前回は、10年前に愛知県で取得したのだが、大変な行列で、時間がかかりかかったのと対照的な今日だった。申請書類を書き終えたのち、受け付けに行くが、四つの窓口の全部が空いている。こんなすいていていいなあ、と職員に話したら、今日は特別だという。それにしても、愛知県とは雲泥の差だ。待ち時間なしで、すぐに受け付け完了などというのは、パスポート申請でははじめてだ。30年くらい前には沖縄県で申請したはずだが、その時のことは記憶にない。それでも、こんなに空いている状況ではなかったと推測する。

その後、時間もあいたので、久しぶりに国際通りにいき、もう一つの所用をさっさとすませることができた。4年あまり前、松尾の浮島通りに住んでいたのだが、ずいぶん変わった。一銀通りを直進する道路ができているのははじめ、あちこちが再開発の準備なのだろうか、かってあった建物が更地になったりしていた。この時期のためだろうか、通りの大部分は修学旅行生たちだった。



会場外会場？も人がいっぱい

基地撤去集会 会場溢れる

(2009年11月8日)

開会まえなのに、もう会場外までもいっぱい
 私たちは海を見ながら、
 スピーカーに聞き入るしか
 ない
 近隣の人、旧知の人との
 出会い多し



沖縄自治の創造へ 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む1 (2009年11月9日)

宮里政玄・新崎盛暉・我部政明編著『沖縄「自立」への道を求めて』(高文研2009年)は、「基地・経済・自治の視点から」を副題にして、沖縄の過去・現在を踏まえて、今後の課題と方向を提案する、注目すべき本だ。

冒頭に、編者は、「依然として冷戦感覚のままている日本、沖縄、米国の対日・対沖縄政策に決別して、さまざまに生起する国際的、国内的な現象を取り上げ、そのときに最大の障害となっているのが、地球化時代にはほど遠い沖縄にまつわる「常識」なるものであった。」P2、「本書は、これまで思い込まされてきた「常識」を飛び越えて、新たな構想をまとめたものだ。」P3と述べる。

確かにこうした「常識」が広く存在し、沖縄のありようを宿命的なものと受身的にとらえ、既成の枠内で「分け前」を増やすことに努力を限定する動きは根強い。教育界などもその典型の一つだろう。オールタナティブなものを描こうとしないどころか、「常識」にとらわれてオールタナティブの存在さえイメージできない状況は根強い。

このことについて、刺激的な提起・指摘をいくつか紹介しよう。

「今の沖縄には、沖縄独自の産業政策や雇用政策なんてありません。すべて全国一律の中央政府が持っている制度が、沖縄らしい衣を着て県や市町村に降りてきているだけです。農業政策も環境政策も福祉政策等々もわかりであります。」P59 (大城肇)

マルタ島、マン島、コルシカ島の例をもとに 「経済自立と制度設計力を持つ自律は正の相関関係にあることがわかりました。地域主権に基づく「自律」がないところに、真の経済自立はないといえます。」 P 60 (大城肇)

それらの島の行政マンや銀行マンや企業家 「彼らが国を背負い、地域を背負い、家族を背負っているという気概を持っていたことです。今の県庁職員でそのような気概を持っている人はどの程度いるでしょうか。むしろ、琉球政府時代のみなさんが「沖縄を背負っている」という気概に満ちていたように思います。」 P 60 (大城肇)

「ここでの自立とは、住民と自治体が、中央省庁の提示する補助事業を唯々諾々と受け容れることなく、地域の実情に合った公共政策を作り出せる能力を獲得することを意味する。また民間企業が、公共依存ではない、沖縄の比較優位を活かせるような経営を行う能力を持つことである。「自治力」の衰退と、民間経済の公共投資・特別措置依存がここまで進んでしまった中で、このような自立を実現することは非常に困難であるが、一步一步それに向けたて努力を重ねていかなければ、沖縄の将来は基地への「隷属」を自ら欲するところに向かいかねない。」 P 176 (佐藤学)

「沖縄自身の自己像と物語を自ら作り出していかなければ、沖縄の未来はない」 P 197 (島袋純)

1996年の「沖縄国際都市形成構想——21世紀の沖縄のグランドデザイン」にかかわって、「沖縄国際都市形成構想の最も特徴的な部分の一つは、グローバル化を明確に意識化し、しかもそれを先取りする、あるいは積極的に対応する形で沖縄の将来構想を描いている点である。」 P 210 (島袋純)

「国家が独占してきた「公共的なもの」を、「新たな公共」を担う国家から自律した「市民社会」が担い、さらにそれが強力な「自治州」構築の基盤となっていく。これが、グローバル化への欧州における対応だが、九五年から九七年の沖縄の動きの中には、まさしくその萌芽が見られたといえる。」 P 212 (島袋純)

「今、沖縄は、そして日本は、大きな岐路に差しかかっている。自治政府の確立は、国家主導の一過性のイベントではない。永続するプロセスであり、「市民」が協働で取り組む創作活動である。沖縄において、強力な自治州政府が作られるかどうか、世界とつながる沖縄の未来が作られるかどうか、世界とつながる沖縄の未来が切り開けるかどうかは、「市民」が作り出す新たな物語を沖縄の人びとが創造し共有し、さらにそれをアジアや世界の人びとと共有していくことができるかにかかっている。」 P 220 (島袋純)

いずれの指摘も、これまでの「常識」を鋭くつくものといえよう。

基地認識をリアルに 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む3 (2009年11月13日)

米軍基地の問題は、相手側が巨大に見えて、動かしようがない存在だという思いに引き込まれそうになりやすい。確かに巨大ではあるが、それだけに、相手側の事情を知ることが重要になる。にもかかわらず、「常識」の枠内に閉じ込められて、それをこえて、事情を知ろうとしないことを問題としなくてはならない。それに加えて、戦前から軍事は秘密で知ってはならないという「常識」がつきまとっている。

こうしたことを超えて、軍事や基地に関するリアルな認識を得ることは大切だ。

この本も、いくつか重要な情報を与えてくれる。たとえば、次のように、である。

「普天間より小規模な飛行場でよいと米政府が決定したことは、今後、有事の際に米海兵隊が沖縄から大規模な展開をしないと決断したのだと考えられる。(中略) 軍事的に見ると、沖縄に米海兵隊のための新基地は不要なのである。新飛行場建設は軍事的な合理性を欠いている。注意すべきは、新飛行場をさらに拡張すると、米海兵隊はグアムではなく沖縄に再び固執する意図をもったと考えてよい。」 P 79 (我部政明)

「なぜ、嘉手納への統合が見送られたのか。それには、二つの大きな理由があった。一つは、有事の際に広い普天間飛行場を使って想定されていた海兵隊の戦略輸送を行えるだけのスペースを、嘉手納に確保できないとする空軍側の理由であった。もう一つは、普天間と嘉手納とは相互に代替飛行場となる関係にあることだ。敵の攻撃を受けるか、あるいは自己によって滑走路が使えない場合には、もう一方を使って飛来する味方機の離発着を行うことにしている。」 P 82 (我部政明)

「普天間や辺野古、高江に、次期主力機となる垂直離着陸機MVオスプレイ22を配備するのは、一九九六年以来の米軍の既定路線であり」 P 166 (桜井国俊)

14. 沖縄の産業・沖縄おこし

子ども未来ゾーンのすごい構想 (2003年11月2日)

これまでも福祉やNPO支援などで活躍してきた若い知人が、沖縄市にある「子どもの国」が改組した子ども未来ゾーンに移って仕事をはじめた。誘いをうけて、新しい同施設をみせてもらった。55億円というとてつもない金額(基地周辺整備資金という名称だったか? 米軍嘉手納基地の周辺ということ)によるすごく立派で、斬新な建物で、子どもミュージアム(体験型の博物館)と多様なワークショップができる参加型施設とでなっている。立派で、創造性溢れる建物の中身をどうするかが、これからの仕事のようなものである。子どもにかかわる多様なNPOの活躍が期待されているようである。2004年4月出発に向けて、今準備作業中である。

とはいえ、前例のない施設なので、大胆で現実的な提案が求められている。たとえば、土日はいいのだが、平日の昼間はどうするのか、となれば、学校との協力関係が欠かせない。これまでも、動物園中心の施設であった「子どもの国」に多くの幼稚園・保育園・小学校低学年が訪れているが、それをさらに発展させていきたいものだ。こんな新しい挑戦に少しでも協力したいと、今、思案中である。

沖縄道路事情と沖縄経済 (2004年6月22日)

10数年ぶりの沖縄生活を開始して気づくことの一つは、道路事情がかなり変化したことである。新しい道がたくさんできて、道路渋滞もかなり減ったようだ。新しい道ができたので、かえって迷ってしまうことがしばしばである。高速道路も通行料がかなり安くなって、かつてのガラガラ状況とはかなり異なる。かつては3時間みておいた那覇から大宜味までのみちのりを、1時間30分でいけるとは信じられない変化だ。この間の公共投資の象徴としての道路投資があったようだ。土木建設業は全国平均の2倍だそうだ。土建国家とさえいわれるような、1960~70年代における全国的な公共投資が、沖縄では近年になって展開されたということになる。

だが、沖縄でも公共投資型経済の先が見え始めてきた。沖縄経済をどう見通していくのか。公共投資依存に代わる自立経済をいかに築いていくのか。教育にひきつけていうと、公共投資型も含んだ企業社会型生き方を支えてきたトコロテンコース型教育システムの変更の必要だということだ。沖縄では、このトコロテンコース型が、むしろ80年代後半に本格化し、いまやその絶頂期にあるとさえいえそうだ。そこからの転換をいかに創造していくのか。こんな角度からの沖縄教育論の検討も必要であろう。

出稼ぎ (2004年12月7日)

先日の報道で、沖縄の就業人口は増加したが、失業率は高くなった、という「奇妙な」ものがあつた。その理由は、季節労働者が大量に戻ってくる時期だからだ、という。その季節労働者は、愛知県などの自動車産業が多いという。そういえば、近隣の知人の子どもの女性もトヨタにいつていた。学生にもいた。私が住んでいた愛知と今住んでいる沖縄とを結びつけるものの一つがこれであつた。沖縄の学生たちにたずねると、アルバイトは最低賃銀の時給600円近くで、愛知の学生たちのアルバイト料とは雲泥の差である。そして、県民所得の約200万円は、全国平均の2/3で、東京の半分である。失業率の高さ、所得の低さ、こうした「格差」が出稼ぎをうんでいるといえようか。

地域起こしの必要、地産地消、などの必要を求めるものといえよう。とはいっても、金額で表現されるほど、沖縄は「貧しい」地域ではないと思う。無論、「本土並み」の消費スタイルをとる部分にとっては厳しい条件となる。その最たるものが、子どもを大学にやるという教育費である。

ここからは半ば冗談だが、私も14年あまり愛知に「出稼ぎ」にいつていたんだなあ、といつたら、「なるほど」という反応がかえってくる。それで家が建てられたんだなあ、と思わず「納得」である。

沖縄の開業率・廃業率日本一は喜ぶべきか悲しむべきか (2007年4月17日)

沖縄の開業率・廃業率が日本一であることはよく報道される。これについての私の考え。

開業率一位は、これだけ意欲的創造的な人が多いのは、喜ぶべきことだ。他府県が少なすぎると思う。今は、創造的積極的にことが求められる時代だ。これまではコース・レースにのつていれればいい時代だつた。その時代は受身的な「指示待ち人間」が得をする。でも、コース・ルールからはずされる人がとつても多くなつている今の時代では、それで大失敗する人が増えている。

廃業率一位は、開業を支えるものが少なすぎるということだ悲しむべきことである。その支えにもいろいろあるが、大切なのは、開業にいたる前に、多様な経験・知恵をどれだけ蓄積してきたか、ということがある。そこに教育の役割の一つがある。ところが、今の教育は、コース・ルールにのつかかる「つめこみ対応受身」人間をつくるのが眼目があり、創造的意欲的人間をつくり、多様な経験・知恵を獲得させることでは、「下手」である。そこをなんとかしてほしい、と思う。今朝の琉球新報教育欄に掲載された私へのインタビューでも、そのことを語つたのである。

サステイナブル・ツーリズムとニューツーリズム 琉球大学本4 (2008年9月4日)

先に紹介した琉球大学編『やわらかい南の学と思想』(沖縄タイムス社2008年)の第四章は「沖縄の観光と産業」であり、とくに観光に焦点があてられている。

そのなかの、花井正光論文には、観光の新しい動向が紹介されている。それは、南城市で、私たちが語り合つていることとかなりハモる。

エコツーリズム、ヘルスツーリズム、長期滞在型観光、グリーンツーリズム、ブルーツーリズムといった、新しいキーワードが並んでいる。

そうしたものは、ニューツーリズムという言葉でまとめられているが、そのこれらの共通点は、次のようにまとめられている。

- ①旅行者が自ら関心をもつテーマにそった観光を選択する。
- ②地域が固有の資源を活用した自律的な観光を重視する。
- ③単に見るだけでなく、旅行先での体験的活動を重視する。
- ④旅行先の自然、文化・歴史にふれ、土地の人たちとの交流を楽しむ。
- ⑤観光を通じて旅行先の地域振興や地域の保全に貢献することを重視する。」（P220～1）

まさに、私たちが語り合っていることである。そして、次のようにのべられる。

「ニューツーリズムでは、受け入れ側となる地域は、こうした旅行者の価値観を受け止めることのできる観光を提供することが求められるわけで、地域住民が参加して行われる小規模でよく管理された観光開発や、地域資源の持続的な利用による観光、旅行者と地域住民が相互に交流できる観光などに配慮した観光地づくりが欠かせないこととなります。」（P221）

こうした発想のバックには、国際的に提唱されているサステイナブル・ツーリズムと結びついている。それは、次のようなものである。

①受入地域では環境資源を持続的に利用するとともに、生態系を保全し、自然資源や生物多様性の保全を支援すること。

②受入地域の固有の文化遺産やその伝統的価値の真正性を護り、異文化間の交流に積極的に参加すること。

③受入地域での安定的雇用や所得の適正な配分など社会経済的利益の供与や貧困の緩和に貢献すること。」

（P223）

こうした考えをもっと広め深めていくこと、とくにその地域に即して発展させていくことが重要になろう。南城市などはまさにその適切な地域であると思う。

この章には、他にも梅村哲夫「島嶼国と観光開発」など、注目すべき論文が並んでいるが、紹介はここまでにとどめよう。

今朝の新聞報道をみると、大規模ホテル計画が紹介され、それらの一部が経済的問題を生じていることも報道されている。

私が思うに、それらの多くは、上記の考え方とはずいぶん異なる方向にあるように思う。たとえば、次の点で。

1) それらも含めて最近のホテルには、まさに富裕層ターゲットの高級ホテルがある。一般の人が広く使用できるものとは異なる。

2) また、大規模ホテルは、たいへん「消費主義」的な観光につながりやすい。引用してきた観光のあり方は、たんなる「消費」でなく、地球と地域と人々の生き方を「生産」していくものであると私は思う。

3) 上記に引用したものは、私がよくいう「手作り」性に親和的なものであるが、それらは、逆に大量生産型

に近いものが多い。

4) それらがもたらす経済効果の多くは、沖縄の地元には残らず、ホテルや航空機などを経営する地元外に流れるものが多い。このことについては、上記梅村論文で、「リーケージ（漏出）」という用語を使用して、指摘している。

そんな意味で、政府や県の観光施策が、経済効果や観光客総数増加など、量的な数値目標をたてて展開するものに偏りがちであることを懸念する。観光の質的問題、手作り性に着目し、ニューツーリズム、サステイナブルツーリズムに合致するような方向の追求を期待したい。

新城明久『沖縄の自立に向けて 農業・産業活性化へのヒント』（2008年10月23日）

県産本フェアで、「まえがき」の文章にひきつけられて、購入する。2007年10月新星出版からの発刊である。

著者は、琉球大学農学部教授なので、私が琉球大学に在勤していたころから存じあげていたが、お話をした記憶はない。どこかでお会いしている可能性は高いが。

関心をもった「まえがき」には、こんな文章がある。

「農業は、あらゆる産業の出発点であり、原点です。そして沖縄には、世界に誇れる製品がほとんどありません。我々は、これらの実態を厳しく受け止めて、基地依存と政府依存型経済から脱却し、自立型経済へと移行して、県民の独自性を発揮、発展させていかなければならないのです。

それはもしかすると、現在進行している金銭的な豊かとは逆の、質素で、素朴で、心豊かな、儉約型の社会かもしれません。」

私の年来の主張と共鳴する文である。私のいう、「地球起こし、沖縄起こし（または地域起こし）、人生起こし」という視点とつながるものをもっている。

さらに「まえがき」にはこんな文もある。

「産業を興し、技術を磨き、世界に誇れる製品を生み出し、県民を豊かにしようと発想した人はいったい何人いたでしょうか。あるいは、米軍占領下にあつて、独自に産業を展開していくことはゆるされなかったのでしょうか。」

「現在、沖縄の農業は危機的状況にありますが、その反面、発展への可能性をも大きく孕んでいます。それは、沖縄ならではの文化、気候、風土、地域性を織り交ぜながら、発展させていける可能性を、すべての産業が潜在的にもっているからです。

可能性への開花が遅れている要因は、沖縄に適した産業を、いまだ見つけ出し、育んでいないだけこのことです。」

そして、本文のなかで、いくつもの興味深い提案・ヒントが出されている。その多くに、私は共鳴し、またヒントをえた。無論、著者と私とでは、これまでの来歴が異なるので、違いはあるが、こうした提案・ヒントと私の「提案・ヒント」をからませていくことは有意義のように思われる。といっても、私は、今日のカミ

った形での「提案・ヒント」をまだまとまった形では出していない。その作業をしなくてはと思っている。

新城『ヒント本』「沖縄の農業の可能性」壮大で確実な提案（2008年10月24日）

一章のなかで、注目される記述を紹介しよう。

「農業は、人類の『心の故郷』です。人は食と農業を通して、土地・作物・家畜・森林が一体となった、「生態系」の一員です。」P15

――まさにエコロジカルな視点である。そのエコロジーの視点は、当然、人間という「自然」のありよう、つまり「生活」のありよう、「生き方」の問題につながっていく。その視点を含みつつ、地域起こしの視点から、産業に関する提案が行われる。

「陽の産業で疲れた心と体を癒し、心の洗濯をする観光業は、陰の産業です。病んだ心身を修復する病院、人生最後を看取る、老人看護施設などもまた、陰の産業です。低開発国とは、その国に合った産業を見つけ、育てていない国のことだと考えています。その国に適した産業は必ずあります。」P16

「陽の産業は内地に任せ、沖縄では、陰の産業の可能性を追求すべきではないでしょうか。」P17

「沖縄は、観光産業のなかに農業を生かし切っていないのが残念です。観光の中で食は、重要な大きな『柱』です。（中略）これらのことから『観食同源』、『観農同源』ともいえるでしょう。」P19

―――私には、陰と陽の表現がややひっかかる。エコロジカルなのだから、この表現を使うなら、むしろ逆ではないのか、と思う。

それは別として、こうして自然の視点からの提案は、当然ながら、沖縄における文化からの視点からの提案につながってこよう。観光についての指摘はとくにそうなるだろう。滞在体験型観光などは、まさに農・自然、そして文化・人々との交流として構想される。

「儲からない農業ですから、出費を抑えるしか道はないのです。そのためにはせめて、自家消費する野菜、果物、味噌などは自給することが、農民・百姓の本来の姿ではないでしょうか。可能な限り自給体制を整えながら、地域に適した主力作目を、バランス良く生産することが重要な課題です。」P23

―――大規模型農業の条件に乏しい沖縄でこそ、こうした農業を展開できる条件は整っている。そして、現在高齢者を中心にこうした農業が展開している。しかしながら、「儲からない」では、住宅建設・子どもの教育費用などを工面することが難しい。そうしたことにどう対応するかという課題が潜んでいることは認識しておきたい。

「食料の自給率の低さが長寿県沖縄を根底から揺さぶっているのではないのでしょうか。さらに本県の弱点は、加工用原料から、食料に転用出来る作目がなく、ゼロということです。」P27

「沖縄島を冬場の野菜生産に重点を置いた、『集約型食料生産基地』と位置づけ、内地の端境期に、沖縄産野

菜を集中的に送り込むことです。」P37

「県産原料から加工・販売まで連続した製造業が存在しないのが、沖縄の産業構造の弱点となっています。」
P69

「下請けの町工場がない中で産業を振興するには、野草を含め地元の植物資源を活用した町工場的食品加工製造業を盛んにし、ネット販売を活用したらいかがでしょうか。」P72

――沖縄の産業構造に対する鋭い指摘であり、沖縄の産業構造を創造的に転換発展させていく営みのこれまでの弱さを鋭くついている。日本（アメリカ）政府の施策・予算に従属した形で、沖縄の産業構造が形成されてきた100年あまりの体質をいかに変えていくか、壮大な構想と地道な実践が期待される。

このあたりのことは、昨年の南城市（琉球新報移動編集局）の地域フォーラムで、私が発言したことと共振している。沖縄のなかでも、南城市はこうした指摘を生かしていける条件が高いのである。

このほかに、具体的な作物に即した指摘は興味深い。私の家庭菜園にもヒントになることがあり、早速実行してみた。たとえば、バナナは「連作障害が起きやすい作物」なので、「移植を繰り返すことがバナナ栽培の秘訣です」P51と書かれており、このところ、「不作」だった原因の一つのように思われ、早速移植をはじめている。

パッションフルーツについても、余り実をつけないので、「午後3～4時頃の人工授粉をお勧めします」P51を参考にすることにした。といっても人工授粉のやり方がわからないので、とにかく指をやってみた。これからももう少し学習しなくてはと思っている。

新城『ヒント本』3 教育・平和と結びつけて（2008年10月27日）

御専門の農業だけでなく、いろいろな分野での「ヒント」「提案」が続く。そのなかで、私にとって「ヒント」になった個所、共感できる個所などをならべていこう。

「四章 教育」のなかで、

「親の豊かな農業経験と子供の現代的感覚とを融合した、親子が一体となった『生活できる農業』、『自給できる農業』を育成することが重要です」P120、と書かれている。

同感だ。このことを実際に展開するには、これまでの学校の枠組みを大きく変えることが必要不可欠だ。というのは、これまでの学校は、こうしたことを推進するというよりは、既存の知識を伝達するシステムを出発点にしているからだ。この大胆な構想を実現するには、発想を根底的に変えていく必要がある。そのヒントになるのは、農業大学校などの農業自営者育成のための各種のプログラムだろう。それらをヒントにしながらか、「親の豊かな農業経験と子供の現代的感覚」をもとにした、大胆なプログラムをつくっていくことが求められよう。

「七章 平和」のなかで、沖縄の農業と平和を結びつける、新しい視点が提示される。たとえば、

「沖縄が世界（特に東南アジア）の平和産業である農業に、貢献できる分野は多いと思います。恵まれない国々

の食料の自給率を高め、工業化への土台を築くのに、沖縄が果たすべき役割は大きいのです。しかし、残念ながら、未だに、世界に羽ばたくだけの農業技術水準を構築していないのが現状です。亜熱帯環境の有利性を生かし、自県の食料自給率を上げるとともに、世界に通用する農業技術を磨き、それを携えて、近隣諸国へと出かけていくことが大切です。」P139～140 と述べられる。

物の奪い合いのなかで平和が脅かされてきた歴史を考えると、逆に近いこうした発想は新鮮だ。実際、琉球大学などに東南アジアなどから多くの留学生が訪れているとき、こうした発想を鍛錬洗練していく必要がある。それは、20世紀前半における日本の東南アジアなどへの支配侵略を思い出して考える必要があるということでもある。その構図のなかで、多くのウチナーンチュが、東南アジアも含めて、とくに太平洋諸島にでかけていった歴史を、どのようにみるのか、という問題とも交差する。

このこととからんで、次の指摘は大変重要だ。

「現在のような際限のない経済発展政策を展開するのであれば、軍隊が背後にいたほうがやりやすいといわざるを得ません。

『足りるを知る』経済学理論の構築が必要です。それは地産地消の経済学、循環型経済学、脱化石燃料経済学などです。節約型経済でなければ人類は欲望の拡大生産により、この地球上から戦争をなくすことは出来ないのです。」P142

このような発想の転換と結びついて、アジアなどの他地域との交流を考えることは不可欠のことだ。

このあたりは、ここ20年来の私の主張と響き合う。

新城『ヒント本』4 農林業と観光とを結びつける (2008年10月28日)

この本の一つの特徴は、観光と農林業とを結びつけるところにある。第11章の琉球大学に観光学部を設立する提案にもそのことが反映している。また、第8章の「経済林から観光林へ」という主張にもあらわれている。そして、具体的な提案がたくさんなされている。たとえば

「観光農業は、農村生活体験型、農業体験型、農産物加工体験型および農産物ショッピング型に分かれます」と述べ、その各々の具体的な提案が行われている。

また、「沖縄の観光の基本は、『心を癒す観光』、『健康を増幅する観光』と位置づけることです。沖縄の島々はメンタルアイランドなのです」P181、とも述べられる。

また、私の長年してきたこととかかわって興味深い提案が行われている。それは、「沖縄という環境下で、人間が楽しく生きるための『生き方総合研究所』は出来ないものでしょうか。」P164 というものだ。

以上連載してきたが、私の主張と共振するところが多いので、いつか共同討論ができれば、と願うものだ。

私達もお世話になった医介輔 歴史の幕を閉じる (2008年11月19日)

今朝の新聞、最後の医介輔の方が高齢を理由におやめになったとのこと。私たちも、1970年代後半、西原に住んでいたころ、中城の医介輔の方に何回かお世話になった。とてもやさしい方だった。

地域の実情に沿った施策の一つだった。戦後の困難な時期、しかも長い間重要な役割を果たされたと思う。

照屋善義『沖縄の陶器 技術と科学』（2008年11月13日）

半島芸術祭 in 南城で、10の陶器工房をまわるなかで、少しは陶器の知識が必要だと思った。そこで、最後にまわった工房で、この本に出会い購入した。

まさに専門書であり、わかるところだけを読んだ。長く沖縄県工業試験場であって、窯業の研究に携わってきた専門家の本だ。専門家には当たり前のことだろうが、陶土→成形→焼成という陶器づくりの流れ、沖縄陶器の特徴についてたくさんのことを学んだ。たとえば、沖縄陶器の特質として、こんなことが書かれている。

「沖縄陶器の伝統技術は、東南アジアの南蛮、朝鮮の陶器、中国の上絵、薩摩の製陶技術が、オーバーラップしながら発達してきました」

「沖縄の陶器には、無釉製品と釉製品とがありますが、無釉製品にはジャーガル原料の荒焼と、上焼用赤土を焼締めた南蛮とがあります。上焼には白土と赤土素地がありますが、圧倒的に多いのが赤土素地です」

といった具合である。その土には、我が家がのっかかっているクチャや、我が畑のジャーガルも使用されているとのこと。親近感がわく。読みながら、あの工房はこんなことに焦点をあてているのか、などと考えていくと、興味深い。

別に陶器づくりを趣味にするわけではないので、今後、焼き物に出会うときにわからないときがあったら、辞書的に使ってみようと思う。

吉本哲郎『地元学をはじめよう』 ワークショップ型地域づくり

(2009年1月25日)

岩波ジュニア新書2008年11月発刊の最新本だ。私流にいうと、「ワークショップ型地域づくり」に最適の本である。地域づくり・地域起こしに関心をもつ方には是非とも読んでほしいと思う。「ワークショップ型」と書いたが、この本にそう書いてあるわけではなく、私から見て、まさにそうだと思うからだ。その「ワークショップ」の進め方については、次回の記事で紹介することにしよう。

ここでは、「地元学」といわれるものについての印象深いことを紹介する。著者は熊本県水俣市の市職員として長年活躍し、最近定年退職された方だ。水俣は、水俣病にかかわって、大変な苦しみをくぐってきた。そのなかで、「地元学」の実践を通して、新たな水俣の地域づくりを展開してきた人の本なのだ。私流にいうと、まさにコーディネイターである。

それは、「あるもの探し」という表現を使っているが、すでにその地域に「あるもの」を調べ発見し、「あるも

の」どうしをつなげて、この本の言葉でいうと、「あるのを新しく組み合わせ」て、新たな価値創造に向かうというものであり、それはまさに私の発見創造型ワークショップなのだ。

そして、「新しいものをつくることとは、問題解決型のものづくり、地域づくりから、価値創造型のものづくり、地域づくりへと転換を促しているのです。それは、社会の困った問題を創造的に解決する社会起業家になることを意味しています。」と述べる。

そして、「地元学は、三つの元気をつくることをめざしています。人が元気で、地域の自然が元気で、経済が元気であることです。」とも述べる。どこか私の「地球起こし、地域起こし、人生起こし」と響きあうものがある。

その経済についても、「経済には三つある」として、

「1 お金の貨幣経済」

「2 手伝いあう結（ゆい）、もやいなどの共同する経済」

「3 家庭菜園で野菜をつくり、先祖に供える花も育て、海・山・川の幸を採取して食べたりする自給自足の経済」

と述べる。

ここまでくると、私との共通性がますます高いことに驚かせられる。これまで、私がこの「地元学」を知らなかったことを恥じるほどである。この本は、東京の書店の店頭で見つけて購入したものだ。

くどくなるが、絶賛の本だ。それにとっても読みやすい。ジュニア新書だけに、中学生でも読めるだろう。

吉本『地元学』本2 発見創造型ワークショップそのもの（2009年1月26日）

この本の第二章「地元学のすすめ方」は、私のいう発見創造型ワークショップそのものだ。この章のサブタイトルは「調べる・考える・まとめる・つくる・役立てる」となっている。

まず「調べる」についてだが、「調べるときの七つの心がけ」を抜き出してみよう。

- ① 現場に出かけて調べる
- ② 外の人たちといっしょに調べる
- ③ 先入観を捨てて聞く
- ④ 対等の立場で聞く
- ⑤ じっさいにやっていることや使っているものなどについて聞く
- ⑥ 話しやすい場所を選ぶ
- ⑦ あたりまえに住んでいる人が超一流の生活者だと思って聞く

②を補足しよう。「地元の人だけではひとりよがりになりますから、地元以外の人といっしょに調べると、日ごろあたりまえと思ってきづいていなかったことに気づきやすいものです。」という。そして、地元の人たちによる地元学を「土の地元学」と名付け、外の人たちによる地元学を「風の地元学」と名付ける。大変おもしろい。

その外の人たちの「行儀作法」として「教えすぎないで、地域のもっている力、人のもっている力を引き出し

ていくのです。引き出す方法は、『驚いて、質問する』ことです。」と説明する。まさに発見型ワークショップにおけるコーディネイターの役割だ。そして、チェンバースの「参加型ワークショップ」の説明を思い出させる。

⑤では、「意見ではなく、やっていることを聞きます」と説明する。これも興味深い。

こうして調べたことを、「三つのまなざしで考える」と語る。

つまり、

① つなぐ

② 重ねる

③ はぐ だ。

そうすると、たとえば「水のゆくえ」「海、山、川での遊び」「食べ物暦、野の草花暦」「集落の成り立ちの物語」「職人マップ」「店を利用するお客はどんな人たち」「風土と住まい」「魚や木、ごみのゆくえ」「生き物のゆくえ」「古い道などと自然神」「新しい道、昔の道」「環境教育、学習」などが見えてくるという。

このように調べることは、先の記事で紹介した「あるもの探し」なのだ。

その代表的な例として8つがあげられている。

1. 地域情報カードをつくる
2. 地域資源マップをつくる
3. 水のゆくえ
4. 直接絵地図をつくる
5. パワーポイントでまとめる
6. おじいちゃんやおばあちゃんたちの人生を聞く
7. 出会った人に聞く
8. 地域の個性を表現する。

こうして調べ、考えたものをもとに、「つくる・役立てる」作業に進む。

「新しいものをつくっていないところは衰退するので、どのように新しいものをつくるのかです。じつは、新しいものとは、あるものとあるものの新しい組み合わせです。だから、調べてわかったこと、あるものを新しく組み合わせさせていきます。つくる・役立てるのは、ものづくり、地域づくり、生活づくりの三つの分野です」と述べる。

こんなやり方で、水俣ではもちろん、三重県や宮崎県、さらにはベトナムの農村などで、実際に行った例を、たくさん紹介しているのが、この本の第3、4章だ。

この本を読むと、自分たちの地元でやってみたくなる人がたくさん出てくるだろう。私もその一人だ。

各地での事例をたくさん紹介した後、「地元学で育つ若者たち」というタイトルの最終章がある。

地域起こしには若者が不可欠だ。どこかの勤め先に就職するというだけでなく、あるいは会社・公務員就職をしつつ、地域起こしにかかわっていくような若者が、たくさん生まれていくことが、これからの時代に不可欠だと思う。

その意味では、この地元学で紹介されているような学習・ワークショップを、若者塾、小中高校でやってほしい。私が年末年始に提案した大学づくりでは、このような学びが軸に坐ることになるだろう。

総合学習の時間での地域学習に、大きなヒントを与える本でもある。公民館や子ども会での学びにもヒントを与える。3年ほど前に、玉城小学校の全校生徒・保護者・教師を相手にして、「玉城の物語」をつくるワークショップをしたが、それにつながるものといえるだろう。

さて、この最終章には、おもしろい、というか刺激的な、著者の語りが紹介されている。

著者と同じ集落に住んでいる若者に、著者は、次の三つを教えたとのことだ。P201

「遊びを決めてから仕事しろ」

「正しいことには気をつけろ、それは人を攻めるのに使われるから」

「下心でつきあえ」

こんな言葉を、20代に聞いていたら、私ももっと成長していて、もっと異なる豊かな人生を送っていたらと思う。この三つの反対のことばかり教えられていたから。

もう一カ所 P210~212

「これまで、知識・学問を身につけ、大きな世界を知ること、そしてそこに出て行くことが知的で立派な人間のたどる道だと思って、暮らしてきた」(内山節)という引用

「地元学はポジショニングのことなのです。自分がいまどこにいるかわかるから、自分が見えてくるのです。やることも見えてくるから、自信がついてくるようです。」

「青年帰農や定年帰農でもない、つくる暮らしへの回帰」「お金とは『つくることの省略』でもある」

地球起こし・地域起こし・人生起こしをつなげようとする私の関心にびんびん共鳴してくる。

「地域に開かれた大学」を越えて、「地域からつくる大学」へ (2009年2月26日)

12月31日に書いた「手作り『大学』をつくろう」には、何人かの方から反響をいただいた。空想のような提案に見えるが、みなさんの声をいただくなかで、もう一步現実的なものへとすすめてもいいではないか、と思うようになった。

その一つのアプローチは、多くの大学が急激に学生を集めるのに苦労している状況にかかわってである。経済的事情が厳しいなかで、現実に通える大学をつくる必要がある、ということでもある。そのためには、いくつかの検討が必要だ。授業料の額を実質的に下げ、入学在学への関門を下げることである。地域と提携して大学を運営し、財政的な安定を確保することも必要だろう。

そうしたものに加えて、もっとも追求すべきなのは、大学そのものが、地域との提携を「理念」レベルから現実レベルへとおしすすめることだ。従来の大学は、なんといってもアカデミズムからスタートしている。大学教員の研究成果を学生に伝えるということが、動機の根底にある。根底におくものに、それに加えて、地域とともにつくる、地域が必要としている知を、かなり実践的につくる、ということを加える必要がある。そして、そのことに、学生自身も参加し、学生が、地域づくりに在学中も卒業後もかかわることをめざす。

そのことは、授業をおこなうキャンパスをかなりの比率で、地域のなかに置くということである。たとえば〇〇大学南城キャンパスというのを、南城市内の公民館や現場などに置くのである。半分を本校のキャンパスで授業をおこなうとしても、半分を現地でおこなうのである。

だから、授業のイメージがまったく変化する。まず大学教員自身がかなりイメージチェンジしなくてはならないし、成長しなければならない。よくいわれるように、大学教員は、研究者としては訓練を受け、一定以上の力量を有しているが、教育者としての訓練はきわめて乏しく、大いに「教育者自身が教育される」必要がある。

そのためには、大学教員だけが授業をするのではなく、地域の専門家と、さらに地域住民と、学生たちとの協同作業で授業をつくりあげるといったイメージが求められる。

こうした発想は、決して以前からなかったわけではなかった。すぐれた意欲的な教師はこうしたことに取り組んできた。だが、個人レベルにとどまりがちであった。その意味では、大学として、あるいは学科、チームなどの組織として、こうした教育活動に取り組む必要がある。

こうした過程を通して、大学は、学生を「掘り起こし」、学生数を確保していくという方向を探ってもいいのではないか。

こうしたことに取り組む大学は、地域にある、ないしは地域に近いところにある大学が望ましいが、そうである必要はない。通信制でそうした大学院をつくらうとする計画を聞いている。私は求められれば、協力を惜しまないことを、その関係者にすでに伝えてある。

大都市の大学でもかまわないし、いくつかの大学が連合して設置したりするのもよい。そして、そうした学生に対して、地域から奨学金を出すのもいい。従来の地域から出される奨学金のイメージを大きくかえるのである。

こんなことを、大学教育に関心をよせる地域人、あるいは地域に開かれた大学をつくっていききたい大学人たちとさらに語り合っていきたい。

そして、こうしたことに関心をもつ大学人に対して協力を惜しまないつもりだ。もう20年間近くになるが、全国各地の数十の大学をまわって、教員の授業づくりを援助する企画に、私は深くかかわってきた。そうした経験を活かして、地域に結びついた授業づくりを展開したい大学教員の応援サポートもしていきたいと思っている。

「南城物語」「南城学」という科目の授業があったらどうでしょう

(2009年2月26日)

休養中で暇だった私も、少々忙しくなってきた。週に2~3回でかけるようになった。その一つは、沖縄大学客員教授として、沖縄大学の新たな教育創造にアドバイスすることだ。今のところ週一回ぐらいでかけている。

沖縄大学には、教育熱心で創造的な教育活動に取り組もうとする教職員が多い。その一つの象徴は、「障がい原論」という科目で、学生が企画運営する授業だ。何人もの講師を選定し、依頼し、その講師による話、討論、交流など、活発な授業が昨年度行われた。

こんな授業をもっとやってみよう、という話が沸き上がってきている。その一つの科目の世話を私がしたらという話もある。そこで、私が思いついたタイトルの一つは、『南城学』『南城物語』というものだ。それをだしたら、すでに『国場学』という科目が行われているという。国場は、沖縄大学があるところだ。正式の科目は、もっと別の難しい名前のようなのだが、通称『国場学』のようだ。他にも、『環境』『子ども』『町づくり』『キャリアデザイン』などといった科目などの話が出ている。

『南城物語』という話は、1月1日のこのブログでも提案した「手作り大学」づくりとかかわる。南城にある興味深い話題をとりあげ、また、南城に在住勤務する興味深い人たちを講師に招き、また実地にでかけて学ぶというものだ。そのなかから、南城発展へのアイデアなどができたら面白いと思うし、地元での仕事起こしにつながり、就職する若者たちが増えたらいいなあ、と思う。

こんな企画を学生たちとしてみたら、面白いと思う。無論、南城市外に住んでいる学生も歓迎する。そして、これらの科目には、学生だけでなく、高校生も、社会人の参加もOKというのはどうか、という話も出ている。

この話は、まだまだ煮詰まっていないし、予算確保の問題もあるので、もう少したないと実際に開講するかどうかはわからない。それでも、こんな話をしているだけでワクワクする。もし「万が一」開講することになったら、アイデアと実際に参加する人を広く募りたいなあ、と思う。その時はよろしく。

大江正章「地域の力—食・農・まちづくり」（岩波新書）を読む（2009年2月22日）

2008年2月発刊だから、ちょうど一年前の本だ。タイトル通り、全国各地の地域づくり事例がたくさん並んでいる。「地域自給ネットワーク」「商店街」「山村起こし」「地産地消の学校給食」「酪農と有機農業」「林業」「公共交通」「市民皆農」などと多様だ。それらはここでも紹介したくなるような事例ばかりだが、それは直接本にあたっただけでいいことにしよう。

印象的なメッセージとして、「はじめに」に書かれていることを紹介しよう。

「自らの出身地であるかどうかとは関係なく、いま暮らす場所の環境や生業を大切にす。そして、農林業であれ地場産業であれ自治体の仕事であれ、まっとうなものをつくり、広めるという倫理観と、適度なビジネス感覚をもちあわせる。そうした人たちが、元気な地域には必ずいる。そこには、世代を越えた人と人の関係性の豊さがある。それは、都市部でも可能だ。(中略) こうしたいわば、「非血縁・半地縁・地域共同性」「知縁・結縁・選択縁」にもとづく生業と関係性の発展が、二一世紀の豊さのモデルとなるだろう。」

「非血縁・半地縁・地域共同性」「知縁・結縁・選択縁」という表現は興味深い。私が住む沖縄の農村部である南城あたりでは、「非血縁」だけでなく、「血縁」がかなり重要な要素になっているが、その他の項目は共通するところがある。

アソシエーション的な要素を含んだコミュニティづくりとでもいえようか。「商品・金銭」に過剰依存するのではなく、「共同性」「縁」に依存した地域づくりということであろう。

この血縁にかかわって、島根県の例をもとにした次の指摘はおもしろい。

「先達の生き方と仕事への姿勢に共感した人間が、後を継いでいく。それは、日本の農村を長く縛ってきた血縁共同体とは大きく異なるあり方だ。それを可能にするのは、農家と地場企業を貫くまっとうなものをつくろうとする姿勢と、行政・農協がときには思惑もありながら応援しようとする態勢である。」

今日の農村では、従来の血縁的展開がなかなか難しくなっているなかで、農業政策も推進している、商品・金銭過剰依存を促進する企業型大規模農業の推進の方向が侵入しはじめている。この両者とは異なる方向、新たな共同的ありようを模索していくことが大切だと私は思うが、そのための参考事例が出されている。しばらく連載した「農人生本」も、そうしたことを示しているといえよう。

「地域之力」本2 I・Uターン 商店街 販売に主導権をもつ農

(2009年2月22日)

先に紹介した「地域之力」本で、いくつか印象深い個所を紹介しておこう。

1) 島根の乳業をしている人の言葉

「自分たちで販売の主導権を握っていかねばダメだと思った。」

『販売までやってはじめて、本当の農民だという気持ちはずっとあった。素材生産だけでは加工業者の奴隷にすぎないでしょう。』

乳業関係者の言葉だが、一般農家でもそうである。「上」からいわれるままに、従ってきた傾向が強かったように思う。農の側からの発信をもっと強めなくてはならないと思う。

「まっすぐのキウリより、曲がったキウリのほうが自然だ。」といった類のことを含めて。農業産品が企画品に統一されることの苦労話を近隣の農家からしばしば聞く。そうでないありようが必要だ。

2) 四日市の商店街の人の言葉

「商店街はまちに根を張っている植物で、大型店やチェーン店は獲物を求めて生きる動物です。動物が来て、食い荒らし、植物を枯らして去っていけば、まちは荒廃してします。」

これは、四日市の創業の地でさえ撤退したジャスコの例をもとにした言葉だ。

3) テレビでも報道されて、私も知っていた「つまもの」で、山村起こしをはかった徳島の話だ。

仕事起こしの結果、高齢者も大いに収入を得るために働き、いまでは「寝たきり老人は二人だけ」という。仕事起こしが、実は「ほんまの福祉」というわけだ。

そして、ここでは、それまでの「閉鎖的」であったのが、IターンUターンを歓迎する態勢がつくられ、いまでは人口比率は6.4%にのぼるといふ。かれらが「地元で生まれ育った住民と深く結びついたとき、地域は確

実に変わっていく」と書かれている。

沖縄での移住でスポットライトが浴びせられているのは、観光の延長線上のものだ。しかし、仕事起こしとつながる移住もかなりあると思う。観光でスタートしても、仕事起こし・地域起こしにつながるものが重要なポイントだろう。その地域に住むということが、その地域とつながり、その地域でなんらかの有用な役割を果たすということになっていきたいものだ。

この本には多様なケースが書かれ、地域づくりにとってヒントになることが多い。

地域おこしの担い手 字・自治会 自治体職員 議員 フリー (2009年4月3日)

このところ、地域起こしの話にいろいろなところで会う。そこに登場してくる地域起こしの担い手が話題になりやすい。

一つは、区長・自治会長を中心にした各字・自治会からのルートだ。これは、タテマエとして住民全員が参加することになっている。そして、字の総会・評議員会などを経て物事が進む。ある意味で、基本ルートだ。何百年も続いてきた。

もう一つは、自治体職員だ。あちこちで話題になりやすい。職員への不満もよく聞かれる。逆に職員からは、繁忙、国県の枠組みに縛られているといった悩みも聞かれる。しかし、創造的・活動的な職員もよく見かける。

もう一つは議員。私はつきあいが少ないので、まだよくわからない。しかし、地域の問題を陳情し、解決するうえで重要な役割をはたしているようだ。

もう一つは、フリーなキーパーソンだ。地域に住みながらも、地域外の世界にも明るく、いろいろな問題提起をすることが多い。私もそうしたタイプだ。

もう一つは、市町村長だ。

ほかにあげれば、県・国、さらには地域内外にある企業。さらには大学・問題提起をするNPOなど組織なども視野に入るかもしれない。

こんな多様な方々が協力しあいハモリあいながら、地域づくりは進むのだろう。

「観光と有機農業の里・阿智」の村づくりの本を読む (2009年4月12日)

先日、東京の本屋で見つけた、岡庭一雄・岡田知弘『協働がひらく村の未来』(2007年自治体研究社)を読んだ。タイトルに書いた「観光と有機農業の里・阿智」は、この本のサブタイトルだ。著者の一人は、村長だし、もう一人はこうした問題の専門家で京都大学教授だ。

この本を購入したきっかけの一つは、観光と農業ということで、南城と似ているなと思ったこと。そして、阿智は、昼神温泉で有名で何度もいったし、中央高速道や国道153線をよく使ったので、通過することは何十回となくあり、親しみを感じたことにある。

しかし、阿智の村づくりがこんな風に創造的に展開していたとは、まったく知らなかった。昼神温泉をめぐる村起こしが展開していたこともまったく知らなかった。山間地であり、過疎に悩んでいた阿智だが、豊かな村おこしを展開し、飯田市との合併を選択しないで自立するどころか、まわりの村からの合併の申し出さえ受けるほどなのだ。

そのヒケツのようなものを書いたこの本について、これから2～3回連載して紹介していきたい。

阿智本 地域づくり主体 地域自治組織＝自治会（2009年4月13日）

阿智村での村づくりの主体は、全村民であることは当然のことだが、

- 1) 自治会
- 2) 村づくり委員会
- 3) 議員
- 4) 職員
- 5) 村長

に、各々重要不可欠な役割を果たすことが求められている。

ここで、私が注目したのは1) 2) である。2) はユニークであるが、1) も普通にはみられないスタイルをとっている。今回は1) について、次回は2) を中心にして紹介していこう。

（以下、引用は、断りがない限り、村長の発言である。）

自治会は、通常の市町村の字組織、町内会などとはかなり異なる。

「住民主体の行政にするためには、最も身近な地域の自治を創り上げていくことが必要であると考え、身近な住民自治組織についての検討委員会をつくって議論していただいた。（中略）組織づくりを強制しないで地域の自主性を尊重していくことを条件に、地域自治組織づくりを村として提案することが認められました。

平成10年に『地域自治組織として自治会をつくりませんか』という呼びかけをしました。自治会の範囲についても住民の皆さんで決めていただきたい、自治会で地区計画をつくっていただき、つくられた地区計画は村の計画と同じように扱っていくということも併せて提案しました。」 P 5 4

この提案をうけて、「明治以来の区や財産区で自治会を組織したところが三カ所、それから旧村で自治会を組織したところが一カ所、谷筋ごとに自治会を組織したのが二カ所」の6つの自治会がつくられ、一年後には「すべての自治会で地区計画書がつくられました。」 P 5 5

無論、このほかに、「行政に繋がる末端の単位として、『部落』制をとって村内に五四の部落をおき、部落長さんに行政嘱託員の事例を出し、手当てを出しています。また年に四回広報を出していますが、部落を担当する役場職員（全ての職員に割り当て、各部落二名ずつ）が内容の説明をし併せて村への要望を聞いてくることになっています。」 P 5 6

全役場職員が部落担当にあたるというのは、職員の意識変革役割変革のうえで興味深い。

「住民から出てきたさまざまな要望は、まず自分たちの自治会で練って、『自分たちで行う仕事』『行政と共同で行う仕事』『行政が全面的に行う仕事』の三つに整理していただきます。」 P 5 6

自治会「組織への交付金を地方交付税のような形で交付しています。活動内容については提案を挙げていただき、村があらかじめ配分した予算内のものについては、無条件に審査もなくお金をだして活動していただくことにしています。」 P 5 6～7

「公選制を前提にして自治会の役員が選ばれるようになれば、予算の提案権も自治会がもったらどうかと思っているんです。その一つの過程として、予算の編成段階の前段では、議会の皆さんで議論すると同時に、住民の皆さんの中でも議論していただく。そのために、議会へ出したのと同じ資料を住民の皆さんにも提示し、自治会も含め『村づくり委員会』やNPO等の住民団体から直接予算要求を出してもらうようにしていきたい」 P 6 9～7 0

旧来の字組織・部落組織とは異なる組織であり、ユニークである。そしてそれらがまさに自治的であり、かつまた村と対等な活動を展開するというのも面白い。ただ、合併前（昭和と平成）の旧村単位に固執する可能性があるが、旧村と重なる場合とそうでない場合とがある。

地方自治が、大規模化と並行して、どんどんトップダウン化要素を強めているなかで、ボトムアップの方向を意識的に追求している点で興味深い。そして住民自らが、地域の範囲を決め、自治組織をつくるというのは、新興住宅地を除けば、滅多にみられないものだろう。加えて、地区計画をもち、自治体の予算にもかかわるとするのは興味深い。

阿智本3 村づくり委員会（2009年4月14日）

前回紹介した自治会は、地域割で、地域住民全員によって構成するものであるが、この村づくり委員会は、自発的に集まったもので構成する。

村長はこう説明する。

『村づくり委員会』というのは、五人以上の住民が自分たちでやりたいことをテーマに、会をつくって活動していただく組織です。飲食以外の学習会費用や研修・視察の費用はほとんど支援しています。村づくり委員会は審査をせず、協働活動推進室へ届けを出せば、だいたい対象となる。」 P 5 9

その具体例は

図書館づくり委員会

健康保養地型温泉地づくり懇談会

環境問題研究会

通所施設を考える会

地域フラワーフレンド会

などだが、「阿智ちむわざ会」といって、「阿智と沖縄の子どもたちの相互交流により、平和学習、文化交流を進

めていく」という目的のものもある。

そして注目したいことは次のことである。

「今までの住民要求は、要求しただけで実行に移される時には行政の手に委ねられてしまうことが多かった。しかも、モノをつくるだけでなく、つくられた後の運営についても、行政任せ。行政にも、モノをつくる費用はあっても運営費用まで出せないということで、住民の要求が実現できないこともある。こうしたことを乗り越えて、住民が、つくる時から運営まで責任を負っていく、あるいはかかわり続けていくことで、より実現が可能となる」P59

実例として、知的障害児をもつ保護者の方々がつくった「通所施設を考える会」が紹介されている。この「会」は、施設建設後、社会福祉法人をつくって、作業所、遊休農地を借りた農作業、パンやクッキーづくり、グループホームなど、この施設の運営にあたっているとのこと。

自由にこうした組織をつくっていけることに併せて、政策・計画づくりへの参加だけでなく、実際の運営にまでかかわっていく点などで注目される組織だ。

阿智本4 議員・職員（2009年4月15日）

議員、職員というのは、もともと住民と自治体とをつなぐ役割をもっているが、それを一層鮮明にさせているのが、阿智の特徴である。

全部落に担当職員2名がおかれていることは、前に紹介したが、議員も廃棄物処分場問題の際、二人一組で全部落をまわって住民懇談会をもっている。議員定数削減のなかで、特定の字の利害代表という要素が減少し、議員は特定の字だけに固執しないで、自治体全体の住民代表的性格を強めざるをえなくなっている。そういうなかで、このシステムは興味深い。

予算作成審議においても、村長・村当局が提案したものを議員が審議するというのではなく、編成段階から議員も議論に参加する形をとる。そして、その審議にあたって、自治会が重要な役割を果たす。だから、自治会（住民）－議員－村執行部が並行して、相互にやりとりしながら、予算作成審議にあたっていくというのだ。

職員も行政事務処理を担当するにとどまるのではない。

もう一人の著者の岡田さんはこう書いている。

「岡庭村長の行政改革の方向性として、社会教育的手法（学びと自治）を行政のなかに取り入れることを自覚的に追求していることが、大きな特徴点です。決して、歳出削減だけを目標にしているではありません。また、地区自治会活動へのサポート業務も通常業務に重なってきます。そうすると、職員の行政のプロとしての能力、資質の向上が問われてくることになります。これは、長野県栄村の高橋彦芳村長が、これからの公務員は、『定型型』ではなく、『創造型』でなければならないと提唱していることと通じるものがあります」P147

これからの自治体職員のありようとして、大切にしていきたいことだ。

阿智本5 一人ひとりの人生の質を高められる 全村博物館構想

(2009年4月17日)

注目したいこと2つ。

一つは、村長の言葉でいうと、こうである。

「阿智村の総合計画では、村づくりの基本を『一人ひとりの人生の質を高められる』ということにしました。人生の質を高められるという表現は、一人ひとりの住民が目標をもち、その実現を目指していくことだと思います。あくまでも、住民の主体的な生き方がその原点にあります。」P85

村づくり計画に「人生の質」を提案するとはステキなことだ。私の「人生起こし、地域起こし」と響きあう。

もう一つは、このことの実体化ということでもあるが、「全村博物館構想」である。それは、フランスのエコミュゼ（英語では、エコミュージアム）にヒントをえている。

「エコミュゼ」については、その発案者のジェルジュ・アンリ・リビエールの「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境の発達過程を歴史的に研究して、自然遺産及び文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」P88という説明が引用紹介されている。

これにヒントをえて、村長は「全村博物館構想」を次のように述べる。

「この構想は、村内の史跡や産業施設、自然環境等を有効活用することにより、地元の住民が自ら行うことに感動を覚え、また、本村を訪れる人々に感動を呼び起こしてもらい、交流人口の増加により観光振興に役立てようとするものです。全村博物館構想の中では、住民一人ひとりが、個性ある生き方をすることによって一芸に秀でる、あるいは〇〇名人になって多くの人に感動を与えることにより、交流人口（観光客）を増やしていくことです。」P88

これまたステキだ。そして、我が南城市にもぴったりとくるものだ。「観光客」を「交流人口」といっているとこもいい。

阿智村を再訪問したくなった。

井口貢編著『入門文化政策 地域の文化を作るという事』(2009年5月2日)

2008年ミネルヴァ書房から発行された本だ。最近、いくつかの大学で、学部・学科・科目が設置されるようになってきた「文化政策」についてのテキストとして作成された本であるが、近年の全国の「文化政策」の動向を知るうえでも好都合の本である。

だから、全国各地の事例がたくさん出て来る。京都、富山、横浜、足助、神戸、大分、鳥取、春日井、大阪などなど。そして、文化政策をめぐる近年の 이슈、たとえば、国際観光、格差社会、ライフスタイル、地域博物館、指定管理者制度、宗教空間、地域ガバナンスなどなど、網羅的に登場してくる。

1980年代後半から、いわゆる「ハコモノ」が各地でつくられるなど、文化政策がいろいろとだされてくる

が、近年の財政削減のなかで、困難状況があらわれてくる。そうしたなかで、行政だけでなく、「民間」が中心になって、行政とも連携しつつ、創造的な活動を展開する動向も紹介されている。

たとえば、神戸のNPO「芸術と計画会議」(CAP)、高知の「NPO砂浜美術館」、大阪の劇場寺院「應典院」など、興味深い事例も登場してくる。

いずれも、地域起こしのアプローチで、文化政策に迫っていることが注目される。

シュガーホール、そして昨年「半島芸術祭 in 南城」を含めて、南城市の文化動向は、全国のこうした動向に伍する動きともいえよう。その意味でも、今後の発展が期待されている。

築山崇、桂明宏編著「ふつうの村が動く時」を読む(2009年10月6日)

「クリエイツかもがわ」から2009年に出された本だ。編者の一人は長年の知人であり、しばらく前、沖縄調査にこられたときにもお会いした。そんな縁で贈呈され、私も関心のある集落おこしをテーマにしているので、読ませていただいた。類書には、「すごい成功」例を示すものが多いなか、本書はタイトルが示すように「ふつうのむらが動く」いていくことに示唆を与えようとする本だ。

京都府京丹後市のある集落を対象にした、行政と京都府立大学研究チームとの共同作業をもとに出来上がった本だ。「先進地域例」や「理論的検討」も含まれており、農村地域の地域起こしに関心がある人には興味深いものが多い。対象集落は、私が住む集落と、世帯数、人口、年齢構成、職業構成、そして、平成の大合併経験など、共通するものが多い。そんな意味では、当事者的感覚で読んだところも多い。

この課題に取り組むにあたって、京都府の行政担当者の、人口減への対処としての、次のような問題提起は、興味深い。

「農業・林業だけでなく加工業・陶芸業・染色業・民宿業・食堂など、多様な経営が存在する「混住化の村づくり」が必要であると考えられる。この「混住化の村づくり」を実現していくためには、次のような戦術が組み立てられる。」 P 5 1

具体的には、

「村のビジョンづくり」活動の展開

外の人を積極的に誘い込むための定住化農村住宅等建設

グリーンツーリズムの積極的な推進

集団的農地利用対策の構築。

農林業の担い手づくり対策

物づくり対策

販売対策

P 5 1 ~ 2

この「混住化」は、第一次、第二次、第三次産業の連携、村の内と外との連携、移住者との連携など多面的だ。

これからの村おこしには必須の視点だ。

村には、生活だけでなく生産（産業）が不可欠だが、それはかつてのように「量」的な視点ではなく、「質」的な視点で検討することが重要だ。その点で、「関係性マーケティング」という注目すべき視点が提示されている。

「商品の機能だけを売るのではないとすると、商品のもっている価値観や商品が主張する生活スタイルを提供できる相手とつながる必要性があります。商品を媒介にして消費者とつながるのではなく、価値観を共有できる消費者とつながることを通じて商品を提供するという転換が必要です。」P 56～7

この本の中で示された先進地事例では、対象地の近隣の旧大宮町が一例として登場してくる。

「旧大宮町では、むらづくり活動の目的をハード事業導入ではなく、地域の再発見→地域課題の析出→地域の将来ビジョンの策定というソフトに絞ったこと。」P 68

このソフト重視と、住民自身による村づくりは、長野県飯田市の例でも登場してくる。合併の際、旧村の公民館を地区館として位置づけ、独立並立の関係のもとで、地域中心、住民参画、機関自立という4つの原則（P 99）を貫いていく。

そして、「経済自立度」を重視し、10の重点プロジェクトを提起するが、私が興味を持ったのは、次のものだ。

②「地域人材バンク」による人材誘導（UIターン者のネットワークづくり：キャリアデザインセンターの活動）

③観光をプラットフォームにした多産業連携

④海外マーケットを対象にした外貨獲得

⑤新事業創発プロジェクト（環境・循環・交流をキーワードにした次世代型産業としての新事業の創発・誘致、新産業の集積：クラスターづくり） P 97

このように、今日における新たな村づくり・村おこしには、共通点が多い。

自立経済の創造へ 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む2（2009年11月11日）

沖縄の経済のありようについても、「常識」を問う鋭い問題提起が続く。

大城常夫の論として紹介されている、次のものもそうだ。

「沖縄が「経済自立」を手中にすれば、さらなる経済発展に必要な場所を求め、米軍基地返還の動きを招きかねない。（中略）沖縄経済をいかに抑制し、米軍基地なしでは地域経済が成り立たないような体制をいかに保持するかが日米両政府にとって重要な課題となる、との見方である。」P 130（前泊博盛）

沖縄経済を抑制する政治が展開されていたというわけだ。さらに、次の指摘も鋭い。

「現在の振興事業費は、公共事業中心の振興策となっている。道路、港湾等の社会インフラは本土並みに達しつつあり改善がみられるが、振興事業費が教育、福祉、医療など県民生活と密接な分野に使えるような制度設計にはなっていない」P 122（宮田裕）

「沖縄は経済問題を「政治」で語り、要請、陳情行政で問題解決を図ってきた。」P 123（宮田裕）

政府による高額の投資が、かえって地域の経済力量を弱めているとする次の指摘も、まさに「常識」を破るも

のだ。

「この10年間に政府の振興策を投入された市町村のなかには、600億円余を投入された名護市のように、市債残高の増加や失業率の増加、法人税の減収など、むしろ振興策による「基地依存度の上昇」を招く自治体もある。」P132（前泊博盛）

「基地関係の振興策を投入されるほど失業率が高まり、財政の基地依存度が増し、地域経済の自立化が遅れるという矛盾が、基地経済によって浮き彫りになっている。」P133（前泊博盛）

経済自立を抑え込んでいた基地依存経済体質が、基地返還によって変化した事例を示す次の指摘は重要だ。

「脱基地で成功したのは沖縄本島中部の北谷町だ。町内の米軍基地返還を受け、その跡利用で成功し、基地の街から県内屈指の商業都市に変貌した。」P134（前泊博盛）

他に、那覇新都心、小禄金城、うるま市街が紹介されている。これらの地区では、「雇用、税収、経済波及効果ともに「返還前」の米軍基地時代より「返還後」の民間活用がはるかに大きな効果をあげている。」P136（前泊博盛）という。

また、基地、補助金依存ではなく、「沖縄に活力をもたらすのは「ものづくり」、「文化」の産業化である。」P124（宮田裕）という。その事例として、「資源活用型新技術開発」がいわれ、サプリメント開発、自然海塩、ニガリ、化粧品、醸造副産物、音楽・文化の産業化、デザイン、健康・長寿・癒しにかかわるものが例示されている。（宮田裕）

そして、実際に「脱依存型の企業マインド」の事例が紹介されている（松元剛）。使用済みの食用油からディーゼルエンジン用の軽油を精製するヘルスクリーン。型枠、ボルト、ネジなどの建築・土木資材と卸売をするタイガー産業が、本土にも、さらには中国にも工場建設をしているという。また、型枠のベニヤ板を外す際の解体専用器具開発の城建、水陸両用の車いす「チェアボート」開発製造の大名鉄工の例などが紹介されている。

このほかに、羽地朝秀は「資源消費型自給経済」で、蔡温は「資源管理型自給経済」P160～1（桜井国俊）という指摘も興味深い。蔡温をそれほど高く評価できるかどうかは、今の私に判断できない。また、「沖縄は全国一の埋め立て県」P163（桜井国俊）であるというのは、意外に知られていないことだろう。

これらは、「沖縄起こし」「地域おこし」に関心を持つ私には有益な指摘の連続だった。